

昭和二十年十一月十二日至十四日於京都

集會記畢

- 昭和二十年十一月十二日 午後二時至三時
- 昭和二十年十一月十三日 午後二時至三時
- 昭和二十年十一月十四日 午後二時至三時

- 昭和二十年十一月十二日 午後三時至六時
- 昭和二十年十一月十三日 午後三時至六時
- 昭和二十年十一月十四日 午後三時至六時

(非賣品)

本會印

本誌目次

- 以弗所書二章十一節至十七節
- 祈禱と聖書を讀むことゝの必要
- 約翰傳十五章十六節
- 約翰傳二十章二十四節至二十九節
- 馬太傳八章壹節至三十四節
- 哥林多後書一章
- 以弗所三章十四節至二十一節
- 使徒行傳九章十一節
- 約翰傳十二章十二節至三十三節
- 約翰傳十三章一節至十七節
- 約翰傳十四章十六節至二十六節
- 腓立比一章二十節至二十六節

特52
407

集會記事



親愛なる兄弟等上兼てより我等が心を協して祈りゐたる各地兄弟等との集會は豫期
 の如く十一月十一日より四日間主の御隣に由て滞なく開會する事を得たり、今其
 會況を略記せんに、集められし者は外國の兄弟等を始として東京、奥州、甲府、横
 須賀、横濱、江州、伊勢、紀州、播州、阿波、大阪、神戸、淡路、及び當地の兄弟等
 と外數名にて其數無慮九十餘名、而して集會は初日より三日間は毎日午前八時より
 祈禱の爲に集り、同九時よりは哥前十四〇二十六以下の集會を保ち、午餐を共にし
 午後二時より聖書讀會を爲せり、十四日主の日は午前九時よりパンを擘く爲に
 集り午後一時よりは哥前十四〇二十六以下の集會を保ちたり、讀べし主、御名の故
 に此集會を祝して萬事我等が思に超て善きに導きたまひしは實に感謝の外あらざる
 なり、殊に當年の如き春秋二回此の集會を保つ事を得たるは之を主の恵に歸せざる
 を得ざるなり、聖言に曰はすや、「其時エホバを畏るゝ者屢ば互に相語りエホバ耳を

傾けて之を聞きたまへり」(拉三〇十六)と、如此我等が今の時に屢ば主の御前に集めらるゝ事は我等の最も幸なる特權とす、何となれば彼の御前には常に充足れ喜樂あるのみならず、我等は彼御自身より聽きて教へられ、慰められ、力附られ、かくて我等の心益す彼御自身を崇め奉るを得ればなり、余爲にかのシバの女王が曾てソロモンの智慧を聽んとて彼の許に來りし當時の様を想ひ起したり、彼は甚だ多くの部從と財寶とを携へてソロモンの前に來りしと雖も、彼其周圍の有様を觀るや全く其氣を奪はれたり、加之、彼、ソロモンが諸の智慧を聽きて其心満足せしが故に遂に彼口を啓きて曰く「常に汝の前に立て汝の智慧を聽く是等の人汝の僕は幸福なる哉、汝の神エホバは讚へば哉」と(列王上十〇一―九)彼は王位を有する者なるが故に彼の心又一の不幸なる事あらざるや明かなり然るに彼却てソロモンの僕を以て幸福なる者と云現はし、其心、彼等を羨むの想を發表す、之れ抑も何の故ぞや、他なし、是れ彼が常にソロモンの前に居りて彼等の如く智慧を聽くの自由を有たざるが爲なり、然るに主イエス世に來りたまふや彼、人々に告げて宣はく、「南の女王

さばきの日に立ちて今の世の罪を定めん、彼は地の極よりソロモンの智慧を聽んとて來れり、夫ソロモンより大なる者此にあり」(太十二〇四十二)と、讀者よソロモンより大なる者とは抑も誰をか云ふ、是れ即ち主イエス御自身にてはあらざる乎、果して然らば我等は宜く之を思ふべし、若し夫れシバの女王ソロモンより聽く事を以て最も幸福なりと言現はしたらんには、我等が今ソロモンよりも大なる主イエスより聽く幸福の彼に優れる其幾倍なるを、聖言に曰く、「凡そ我に聽き、日々わが門の旁にまらわが戸口の柱のわきに立つ人は福なり」(箴八〇三十四)と、曩には女王常にといひ、今又此處に日々字を見る、而して其節末には孰れも幸福なりと記されたり、是に由て之を觀れば我等に於ての最も幸福なる事は唯だ日々又常に神の言を聽くにあるなり、然らば我等は今之を誰より聽くべき乎、請ふ路加傳九章卅五及び三十六節を見んことを、曰く「聲、雲より出て曰けるは此は我愛子なり之に聽くべし、聲寂たれば惟イエス一人を見たり」と、嗚呼主イエス御自身より聽く者は如何に幸福なる哉、讀者よ我等今這共に主の御前に集められて其溢るゝ恵に浴し且つ主よ

り言を聴く連日、此の幸福は果して如何ぞや、今の時に於て尙ほ且つ此幸福を感ず、況や天に於て實際主の御前に集めらるゝ其時をや、主よ速に來り給へアメン、今左に今這聽せられたる聖言の筆記したる者を綴りて之を親愛なる兄弟に分つ、讀べき主御名の故に此記事を祝して聖徒の益となしたまはん事を、

編者 識

以弗所書二章十一節至十七節

特に此十三節に付て思ふべし、キリストの御血を流したまひし結果は今我等が神の御前に近けられたることなり、我等は嘗に神より祝福を蒙りしのみならず、神と我等との間にありし隔ての幕は全く取除かれて憚る事なく神御自身に和ぎぬ、是れ即ちキリストにありて我等が有する處の分なり、夫れ神は光にして少の暗き處なし（約第壹一〇五）、神は光なるが故に神の前にては凡ての物悉く照らされて隠れず、（弗五〇三）されば神の前と人の前とは全く相異なるものと知るべし、詩五十六一―二十三を見るに、人間の中には惡を照す光なきが故に盗人を見れば却て之をよしとし又姦淫

の伴侶となりて毫も其惡を責めざるなり、人は既にかゝる者なるが故に神も亦已に恰も似たる者ならんと思ひて其御前に懼をかざるなり、されど神は其罪を御前に列ねて必ず責めたまふべし、人は誰も其心に隠しある罪あらざる者はなし、されど其罪が人の前に露顯はれてをらぬ故に彼は平氣なれど、彼若し神の前に出るならば神は光なるが故に必ずそれを顯はして又蔽ふこと能はざらしめ給ふべし、約翰傳一〇五に曰く、光は暗に照り暗は之を曉らざりきと、暗は暗として少しも光を悟らすとするも、光は光なるが故に照り輝きたり、即ち主イエス世に來りし時「我は世の光なり」とて凡てを照らしたまひたれば却て暗を愛する人間は己が照さるゝ事を嫌ひて遂に彼を十字架に釘くるに至りしなり（約三〇二―二一）、如此神の前にては人何をも隠し置く事能はざるなり、かのアダムはエデンの園にて神の聲を聞きし時、彼の良心神の前に働さければ彼は神の面を避けて身を匿くしたり、是より先きアダムとエバとは裳を造りてその裸体を蔽ひ之を以て相互の前に耻を感せぬ様になしたり、されどアダム神の聲を聞きや、神は未だ裳の事をば何も云ひたまはざるに彼の心早や其事の良からざりしを悟りて御

前より遁げ出せり(創三〇七―十)而して此事實は神の前と人の前との全く相異なるを
 示す者といふべきなり、又賽六〇一―六を見よ、かのイザヤは六章に至るまではイス
 ラエルの事を預言して、彼等は罪を犯せる者にして、神の前に置かるべからざる由を
 語りしが、此處に於ては彼は已が如何なる者なるやを明かに知れり、曰く禍ひなる哉
 我はるびん云々、而して彼がかく言現はすに至りしは、彼が神御自身の前に来りし
 が故なり、如此神の前に来りて其光に照さるゝ時には常に他人の如何なるかを知るの
 みならず、自ら照らされて己が眞の有様を知らしめらるゝなり、而して此は神が光な
 るの故にして又神の前に何事をも隠す事能はざるの証據たるなり、又路五〇一―八に
 於ける夫のペテロハ主御自身より綱を卸して漁れどの言を聞きしも未だ汝はしかく
 の者なりとの言を聞かざりき、然に彼自白して己が罪人なる事を言現はせり、之も亦
 彼が主の光に照らされたるが故によるなり、我等之を味は幸なり、主は實に光にい
 ませば彼必ず先づ人を照して己が眞の有様を知らしめざるを得ざるも、彼又恵と眞と
 に充るが故に照して後に必ず恵む事を爲したまふなり、

哥後十二〇一―七を見るに、夫のパウロは傲る事なからん爲に肉体に刺を予へられた
 り、されど彼が此刺は樂園にある時必要なかりき、何となれば樂園は神の御前なるが
 故に彼其處にありて素より傲る事能はさればなり、されど彼、神の前を退きて後刺を
 予へられたり、此は彼にも傲る性質あるが故なり、
 既に云へる如く、我等も今は神の御前に置かれたる者なれど、我等如何にして其御前
 を感ずる事を得るや、他なし、神の言に由てなり、抑も神の言は活て能力ある事神の
 性質と異らざれば、神の言の前は即ち神の御前たるなり(來四〇十二、十三)此故に我
 等は神の言を讀む事を常に要するなり、されど之を讀むに、若し己が智慧を用ゐんと
 せば、決して言の言たる權威を味ふを得ず、神の前を感ずることを得ざるべし、我等
 は神の言を以て己の良心を働かせば幸なり、

我等は今神の御前即ち光の前にありて神御自身を喜ぶの特權をもつを得たり、されど、
 人の天性已を照らす者を嫌ふが故に誰も光の前と神御自身とを喜ぶ事を願はざるべし、
 されど我等は光に來りて自己の如何なる者なるかを知らされたれば却て之に由て主の

我等の爲に死にたまひし惠を一層味ふ事を得るなり、而して又我等は今神の前に安心を有つなり(羅五〇一)人間は人間の神を作る事自由なるが故に、眞の神も亦我等が心中を照らし得ざるべしとの觀念を有し居らんも、神の凡てを照らして残したまふ處なきは既に云へるが如し、我等も今は彼に由て照らされ居るも、我等の罪と不義は既に業に主イエスに由て取除かれたるが故に最早神の前に恐を懷かざるなり、嗚呼此惠は如何に大なる哉(弗二〇一六)詩四〇三を見よ、其處に「エホバは神を敬ふ人を分ちて云々」との言を見る、此の分たれたる處の人の有つべき分は何ぞや、同六、七、八節は即ちそれなり、嗚呼御面の光を以て照らさるゝ者は幸なる哉、我等は實に照らさるゝ事に由て喜ぶ者なり、終に詩五十〇二十三を讀まん、我等は曩には已が榮や譽をのみ求むるに熱心なる者なりしが、今は我等の爲に死にたまひし主御自身を喜び且つ彼の榮を思ふ者とせらる、而して神は此御方を以て我等の靈を喜ばしめ飽かしめたまふなり、詩百七〇九に靈魂とあるに注意すべし、

祈禱と聖書を讀むことゝの必要

(帖撒尼迦前書五〇十七、十八節朗讀)我等に於て最も幸なるは常に祈禱と感謝とを爲す事なり、而して此は又我等の大なる特權なり、何となれば我等は祈る事に由て親しく神と交る事を得るのみならず、之に由て神を敬ふ事を得且つ自らの靈益す生長するに至ればなり、勿論神は我等が祈ると否とによらず惟御自身の御思召に由て恵みたまふ御方なりと雖も(羅九〇十五、十六)又我等に祈と感謝とを求めたまふ即ち帖前五〇十七、十八に示さるゝ如し、而して神は我等が如此爲す事を喜びたまふを知る、夫の路十七〇二十一十九に於る十人の癩病者を見よ、彼等は皆惠に由て潔められたる者なるに、其惠を知りて返り來り主の足下に俯して感謝を捧げし者は唯一人なりき、思ふに此一人の感謝は主の御意を喜ばし奉ること大なりしなり、又詩五十〇十五、の御勸め如何に福なる哉、なやみの日に神をよび、神我等を助けたまひ、我等は神を崇め奉るなり、世人を見よ、彼等は神なき者なるが故に祈る事又感謝する事を知らず、されど神はかゝる者にも日を照し雨を降らして御自身の惠を示したまふ、彼等之を知らば、

神御自身を敬ふべきに彼等の心毫も其念なく、惟だ神をなき者として歩み居るなり、我等若し感謝祈禱の必要を感せずば我等も亦た世人の如く神をなき者として歩む者と云はざるを得ざるなり、「扱て祈禱なる者は世人が僧侶に祈禱を頼むが如き次第の者にあらずして親しく神との交りに於てなすべきものなり、神と我等との間に今は祭司あることなし、我等は皆潔き祭司とせられたるが故に直接神に献物を爲し(彼前二〇五)各自神と直接に交る事を得るなり、此故に我等は如何なる事情の中にあるも常に感謝と祈禱とを以て過ぎ往くを得る此特権は如何に大ならずや、又我等小き事は別に祈を要せざるもの、如く思ひ又餘り小き事を祈らば神様が御面倒に思召すならんなど思は、此は大なる誤なり、聖書は却て「唯毎事に祈禱をし懇求をし且感謝して已が求る處を神に告げよ」(腓四〇六)と示して我等の求る處、單に大事のみに限らざる事を教へたまへり、又若し或時間のみ神と交り其他の時をば我儘に費さば其行爲は、かの見ること聞くことも得爲ざる偶像に事ふる人に似たりと謂ふべし、我等は活る神と直接の縁を有するが故に事の大小を問はず、凡ての事を神に告げなば誠に幸なり、我

等は又如此爲す事に由て神を崇め得るなり、「我等は自然に彼の事柄と此の事柄とを區別して一は神に倚頼みて爲し、一は自ら己れにて爲すものなるが此は未だ實際に自己の死にし者たるを知らざるが故なり、何となれば若し自己の死にし者なるを知らば如何に些少の事たりとも自ら之を爲すの力あらざる事を言現はして神にこそ倚頼むならめ、主イエスを見よ自ら御自身を守るの力を有したまふこと勿論なれども、只管神の守護を要する者として神に倚頼みたまひき、(詩十六〇一)況や我等が如き無力無智の者如何で神に依頼せずしてよからんや、我等の心常に神なくては何事をもなし能はざる者たるを知り居りて、宗教的に流れず、實際に祈禱せば幸なり、神の言は我が靈の糧なれば我等常に聖書を読む事最も必要なり、即ち「人はパンのみにて生る者にあらず唯神の口より出る言に因ると録されたればなり、(太四〇四)世人は祈の必要を知らざる如く又言の必要をも感せずと雖も、我等に於ては此二者孰れも缺くべからざるなり、而して我等が聖書を読む事は人の勧めを待ちて後然すべきにあらず、些少しづにても日々自ら讀む事必要なり、若し我は聖書を読むの時間なきが故

に讀まざるなりと云は、誠に不幸の人と云はざるを得ず、一寸開き見る一節一句にて大に靈魂の糧を得ることあるものなり、殊に毎朝之を讀まば幸なり、一日の中には種々な事情に出逢ふことなれば預め神の言にて靈魂に力付けらるゝ事肝要なり、賽五十〇四に朝毎にとあり又耶哀三〇廿二―廿四に仁愛と憐れとの朝毎に新なること記さる、又我等は救の事教會の事主の來たまふ事其他の眞理を知りをるゆる、聖書を左まで珍らしく思はず隨て讀みたき心薄きことあり、されど神の言は魂の糧にして腦髓に貯へおくべき知識にあらず、實に聖書は人間の書物の如き死物にあらずして活る御方を示す者即ち主御自身に付て記されたる者なれば(約五〇卅九)我等は一節を讀むにも主を識らんと心の心にて讀まば必ず大なる益を得ん、若し然らずして唯聖書知りになりたればとて何の益あらん哉、我等若し此世を歩む時に神の言に導かるゝの必要を識らずんば其途常に危からん、然るに我等世を歩むに世上の事柄は從來の習慣に由て爲し神の事柄は神の言に由て爲さんと云はば其行ふ處は純粹の宗教的と云はざる可らず、我等は見る所によらず信することによりて歩む者なり(哥後五〇七)加之此の世の子

輩は此世に於て光の子輩よりも巧なるが故に(路十六〇八)我等若し己が智慧を以て世人と相匹敵して歩まんとせば、我等の爲す處必ず彼より劣らん、此故に我等惟だ神の言に由て信することによりて歩まば幸なり、(羅十〇十七)神の言は常に我等が靈の糧なるのみならず又路の光なれば(詩百十九〇百五)我等にして若し日々神の言の必要なるを感せずば恰も暗夜に燈火なくして道行くが如き者なれば必ず躓き倒るゝ事あらん、又神の言によりて眞の智慧を得る事は詩百十九〇九十八、九十九、百節等に記されたるが如し、

然るに我等が常に聖書を讀むに當て出逢ふ處の妨げは即ち讀む處の言の解し難き事なり、されど兄弟より説明を聞けば、能く分り自ら讀めば面白からずと、いひて遂に自ら讀むことを止めなば、是れ我等各々の衷に住みたまふ聖靈を侮る次第なり、故に我等は聖書の難句に出逢ひて益す神に依頼しべし、聖靈は、我等の師にいます故に(哥前二〇九―十二)如何なる信者といへども彼より教へられて日々必要の糧を與へらるゝなり、

約翰傳十五章十六節

我等が主を撰びしにあらすして主が我等の如き者を撰びたまひしとの事を知るは誠に福なり、我等の天性は決して神御自身を喜ばず又慕はざるなり、殊に主イエス世に來たまひし時には賽五十三〇二にある如く人間の眼に立派に見ゆる御有様なかりしがゆゑに其性常に威張ることや人眼を驚す事のみを尊敬する人間は此主イエスを見て喜ぶことなく又之を我が主として撰ぶこと能はざりし也、實に主は其思召を以て我等を撰び御傍に侍らしめたまふ、是れ主の恵なり、太四〇十八―二十二に於て二度とも「見たり」といふ字あり、即ち主が見たまひしといふことは如何に福なるかな、ペテロ等は魚を漁るには頗る熱心なりしならんも、神を見るに熱心ならざりき、唯だ主は彼等を見たまひて、我に従へどの御言を與へたまひぬ、彼等は此言に引き出されて一切を捨ておきて従ひ奉りたり、嗚呼主の御言は如何に權威あるものぞ、實に光あれど宣へば光は生じ、死者に命すれば墓の中より出で来る、其言なるがゆゑに此言の働に由て彼等は主に従ひしなり、我等も亦た之と同じ、我等の中自ら主を捜し求めし者一人

だにあることなし、却て主の方にて我等を見たまひて我等が我儘の道を走り神に敵しをりし其最中に我等を召したまひて今は御身のはどりに置きたまふ、あゝ此の恵は如何に大なる哉、太十三〇十一十六を見るに主イエス世にいまし、時人々直接に御言を聞きしかども少しも其を解せず、唯だ弟子等のみ奥義を知ることが賜はりたり、汝等の眼は見汝等の耳は聞くがゆゑに福なり」といひたまへる實に主と偕にある者の特權ぞ大なりし、今も然り聖書は不信者の毫も其意を解することも能はざるものなれど、我等に於ては容易なり、此は之を解するの力我等にあるがゆゑにあらす、否我等は寧ろ世人よりも智慧なきものなれど、唯だ主と偕に居る者とせられて主より教へらるゝに

よりて然るなり、
主イエスを見て父の生みたまへる獨子の榮を味ふことを得し者は福なる哉、(約一〇十四)されど賽五十三〇二約一〇十四とを對照せば、我等が主イエスを知るを得るは全く神の純粹の恩にのみ由ること明白なり、神往昔シナイ山より大なる御威光を以て語りたまへば、人々恐れをのゝきて之に近かず、神今謙りて恩を以て顯はれたまへば人

々之を藐視りて敬はず、されば今我等が主の御傍に侍べる者とせられつるこそ奇しき恩寵なれ、我等世にありて何をもち有たず、然れど唯一つキリストを有つ、世の人は世にありて一切を有てりされど唯一つキリストを有たぬ、されば貧きに似たりども我等の如く富める者あることなし、パウロは「われ我主キリストイエスを識るを以て最もせされる事とするがゆゑに凡てのものを損となす我かれの爲に既に此等の凡のものを損せしかど之を糞土の如く意へり」腓三〇八といへり、彼はキリストを識ることの福を深く味ひたれば一切を損すれど之を惜まず却て穢きものを打棄てし心地せり、扱われらは今荒野を旅行しをることなれば種々の事情に出逢ふが、事情は常に主御自身を味はしむるの機となるなり我等事情に逢ひ神の旨を知らずして思煩ひ或はつぶやきなどすることあるが、主は我等よりも智き御方にいまし、又主の愛は我等の思に越ゆる愛ゆる我等の注文通りならで、御自分の思召のまゝに我等を取扱ひたまひて、我等をして主と借に居る者の福を益々味はしめたまふなり、(弗三〇二十) パウロその肉体に刺を與へられし時之を取去りたまはんことを三たび願へり、主若し彼の願のまゝに取去りたまひしならば彼は其を以ていと心地よき事と思ひしなるべけれど、斯くては彼「弱きに於て全くなる」キリストの御能力を味ひその満ちあまれる恩寵を味ふの機を失ひしならん、(哥後十二〇七一九) されば我等が主御自身と其恩寵とを知るは、夫の學生が學術を研究して理屈を腦髓に納め込む如きものにあらず、實際の経験に由て益々主の御榮光を學ぶなり、主は我等を見て召したまひしことなれば素より我等の如何なる者なるかをば最初より知りたまへば、何事ありとも決して途中にて棄てたまはず、いと大なる寛容と恒忍とを以て、或は慰め或は懲らしめ我等をして喜び勇みて其足跡に従ひて歩しめたまふ、あゝ我等不信なればとて彼は誠信なり彼は己に違ふこと能はざる御方にまします也、

約翰傳二十章廿四節至廿九節

「信せざる勿れ信せよ」また「見ずして信する者は福なり」との御言を味ふこと幸なり、扱トマスが是等の言を聞かしめられたる故は彼が主に對して疑を懐き己が五官

に觸れ自ら承知する上ならでは決して信せざるべしとの思を有ちをりしによる、而して唯だ彼一人のみならず人は皆同様の思を抱くものなり、

抑も我等が信すべきものは神の言なり、神の言は事實を示すものにて眞實にして又確なれば我等唯だ單純に之を信せば幸なり、若し然らずして己が心に適ふゆゑに之を信すといはゞ是は信するといふものにてあらず、我等が信するは己の心の思に基きて信するにあらず、唯だ動かざる事實なるがゆゑに之を信するなり、事實は事實なり人の思に由て素より事實は動くことなし、かのトマスを見よ、彼は主の復活りたまひしことを聞きしとき之を信せざりしが彼が然か思へばとて主の復活りたまへる事實は變ることなかりき、無神論者は世にありて智慧あるものにていと利口らしく其理屈をならべ立つれども彼は之に由て神の神にまします事實を動かすこと能はず、神は却て彼等を愚者といひたまふなり、(詩十四〇一)夫れ神の言は事實を示すものなれば我等聖書の中に解し難き處信じ兼ねる事に出逢ふとも理屈を曰はず又疑ふことなくして唯だ信せば幸なり、主イエスがマリヤに顯はれたまひし時(約二十〇十三一十六)マリヤは

その主なるを知らずして園を守る人ならんと思へり、されど主が主にいます事實は彼の思に由て變ることなかりき、又弟子等は主の海上を歩みて來たまふを見て之を變化と思ひて懼れたり、(太十四〇廿二一廿七)されど彼等の思の如何に拘はらず主は主にいまして「我なり懼るゝ勿れ」どの御言を賜ひて彼等に御親を示したまひぬ、扱我等は間違の思や小さき心を以てするゆる主の御性質をよく味ひ得されど、主は我等の思の如何に由らず已に違ふこと能はざる御方にして其御性質のまゝに我等を恵みたまふこと如何に感謝すべき次第なる哉、是故に聖書に録されたる言を其儘に信するにと最も福なり、耶十七〇九に「心は萬物よりも偽る者にして甚だ悪し誰か之を知るを得んや」とあり、我等は己が心に欺かるゝ者なり、我等虚言を曰ふ人をば中々信用せねど扱この人よりもまた虚言を曰ふ我心を信用するは可笑しき事なり、此心に欺かれて主の貴きを味ひ得ぬ如く亦た自己の如何なる者なるか其事實に心付かぬものなり、路廿二〇卅一卅四に於てペテロはサタンに饒はるゝ時必ず失敗する人なり、是れ彼が實際なる目方なり、然るに彼は己が心に欺かれて我こそは生命をも捐つるほど

忠義なる者なれと思ひしが、彼が自分にて何程かく思ひても之に由て自己の無益なる者たる事實は變らざりき、我等は又ペテロの三たび主を識らずと言現はしを見て、嗚呼もし我なりしならんには彼の如くは曰はざりしものをも思ふならん、又兄弟の失敗を見て我は彼の如くは失敗せじと曰はん、是等は皆己が心に欺かれて自己の何物なるかに心付かぬ次第にして此の傲慢なる思に由て自己の必ず失敗する者たる事實を變ずること能はず、されば何事につけても我等の思は更に當にならぬものにて唯だ神の言のみ動かざる真理にてあるなり、是故に之を信するを最も福なることとす、實に信すること由てこそ一切の喜と平安とに充たさるゝなり、(羅十五〇十三)

馬太傳 八章 一節 至終

此の一四に於て癩病者が主に潔められし事實を見る、人間が神に對して行ふべき事を示す律法は癩病人をば汚れたるものとして退け民の中より出すことなれど、(利十三〇四十五、四十六) 人間を惠まんとて顯はれたまへる神は親しく彼に接して其病を愈

したまへり、之に由て律法と恩寵との區別は明なり、二節にかの病者曰はく「主もし旨に適ふときは……」(主もし欲せばなり即ち)といへり、主は我欲すとて直に彼を潔めたまへり、其心のまゝに癩病を愈し得る者神の外に何處にかあるべき、祭司等は宗教的に殿にて事へをれど、今は此事實を見て神御自身に従ひ奉るべき事なりき、次に百夫の長主の御許に來りて其僕の病氣を申上げしに主は「我ゆきて之を愈すべし」と曰ひたまへること如何に福なる御心なる哉、百夫長は主を己が屋下に入れ奉るにさへ足らざる者たるを言現はし主の神たる御權威を信じて惠を蒙れり、神御親ら地上に來りたまひければ最早やユダヤ人異邦人の區別なく主イエスが神にましますことに由て惠まれたり、次に十四一十七に於て主は熱病人に手をつけて癒したまへり、我等若し然せば如何、我は其熱に取付かるゝとも彼の熱は去らじ、主は誠に我等と異なる御方なる哉、此婦、病の癒し後主に事へたり、如此我等も惠まれし後ならでは主に事ふる事能はざるなり、此時主の醫したまひし病者は彼一人に止らずして猶ほ他に多くありき、しかも彼等が主の前に携來られし時は日暮にてありしなり、我等若しかゝる場合

に接しなば多分己が勝手を唱へて明日來り癒されよと云ふならん、されど主は愛に充る御方なるが故に御親らの骨折を惜みたまはず、悉く醫したまへり、如何なる名醫にても、能く病者を皆醫す事能はず主の能力こそ神たる力なれ、又主は素より神にいますも又人性を備へたまへば、時に肉に疲勞を感じたまひし事あり、約翰傳四〇六の場合の如き是なり、されども主の愛は一賤婦の惠するゝ爲には御自身の疲勞をも全く打忘れたまひて彼に御言を交へたまひたり、嗚呼彼の御心は如何に愛に満るぞや、其十七節に注意せよ、世には此意味を誤解し、此は主が我等に代り御自身に病氣せらるゝものゝ如く云ふものあれど、此は大なる誤なり、主が我等の代りとなりたまひしは其御生涯に於てにあらすして十字架に於てなり、即ち彼前二〇二十四の如し、さらば此十七節は主が能力をあらはしたまひし時に引照せられたるなるを思はゞ、主が我等に代りて病氣を爲したまふにあらざることを明なり、實に主が御能力をあらはしたまふ時は餘義なくにあらずして、常に御自身の御心に先づ思ひやる事を爲したまふ恰も可八〇一―九に於て、主がパンを予ふるに先づ彼等を思ひ遣りて憫みたまひたるが如

き其一例なり、如此先づ多くの病者を思ひやりて後悉くいやしたまひたり、次に十八―廿二、茲は最早や主が世より捨てられたる御方として記されたるが、時に一人あり來り從はん事を求む、主、彼に答ふるに狐は穴あり空の鳥は巢ありされど人の子は枕する所なしとのたまひて、我に從はんとせば我の外何の得る者なかるべしとの事を示したまへり、我等若し何をか得んとして彼に從はゞ唯だ失望を招くのみ、主御自身のみを以て満足せば幸なり、次に二十三―二十七、弟子等海を渉るときに波風に出逢へり、されど主が彼等と借にいましゝゆる彼等は安全なりき、人の思は大船ならば大丈夫と云はん、されど更に大なる波起らば如何、主と借に小舟にあるは、主なき大船にあるよりも安全なり、主は「我は世(時代)の終まで常に汝等と借にあるなり」といひたまへり、次に十八―廿四、人間は惡鬼を逐出す事能はざるのみならず、其途を過ぐるさへ能はざる程力なき者なり、時に主イエス鬼を逐ひ出したまへり、人々之に由て主を榮め又喜ぶべきに、彼等は主の來たまふことに由て豕を失ひしを大に不幸に思ひて、主イエスに其地を立去らん事を求めたり、嗚呼サタンの轡を解放つ御方よりも財

産の方をよしと思ふは人間の心なり、願くは我等が心の愛する者は主御自身にして豈にあらざらん事を、

哥林多後書一章

此書を読みて我等が受くる所の教は、我等種々信仰を妨げらるゝ事情に出逢ふが、其中に於て我等が神との直接の縁を有する者たるを味ふ事にてあり、扱て我等は多くの眞理を以て種々なる事を教へらるゝ事あらん、されど若し眞理を知るのみに止りて神の御前を知るを得ずんば其心決して満足すること能はざるべし、即ち録して「汝の前には充足る喜樂びあり云々(詩十六〇十一)とあればなり、然らば我等の満足る喜びは聖書の意味を能く解得したる時にあらず、又救はれたる事を知りし日のみにあらずして實に我等が神の御前を知る時にあるや明かなり、本書は我等に眞理を教ゆるよりも寧ろ實際の經驗に付て多くの教を予ふるものといふべし、かのパウロは聖靈に導かれ自然に己が思ひを言現はしたれば之を讀む事に由て彼の心は明かに知らるゝなり、彼

は信することに由て歩み又信するに由て云へり(哥後四〇十三)彼は自己の譽にならぬことをも神の恵に由て毫も掩ふ處なく言現はしたり、即ち彼肉体に刺を予へられし時に我が傲る事なからん爲云々とて、己は此刺を予へられされば傲る者なりとの事を憚らずして言現はせり(哥後十二〇七)我等の自然は他人の傲るを見て之を戒むれども自ら我は傲る者なりとは云はざるが、彼は却て自己の傲る者なるを言現はして自由に語りたり、我之に由て彼が常に主との幸なる交りに居りし事を知るを得るなり、彼は實に日々出逢ふ處の事情に由て益す神と親しく交り居りたる者といふべし、されど如何に此は彼にのみ有する信にあらざして我等も亦た皆彼の如くあるを得るなり、彼は信する者の模楷なり、何となれば彼聖靈に由て我等に勸めて「兄弟よ爾曹皆我に倣ふ者となれ且なんぢらの模楷となる云々」(腓三〇十七)といひたればなり、當時コリントの兄弟等の中にはパウロを輕んずる人又は前書三〇四の如く分裂紛争をささして彼を重せざる仲間もあり、且は又前書九〇一の如く彼の使徒たる事に就て疑を懷きたる人々さへありしかども、彼の心は主の名の爲に其集會を愛するが故に是等の事に接する

毎に却て自由に語る事を得たり、されど彼の心周囲の事情に由て少しも慰めらるゝ處なきが故に彼は神御自身の慰の已が心に必要なるを知り居たり(哥後一〇三)世人を見よ、彼等は世に於て已が心を慰むる物を有つが故に他に慰むる者を求めるの必要を感ぜざれども、信者に於ては大に然らず、我等の慰めは神御自身の外あらざるなり、可十
一〇十五を見るに當時殿に居りて賣買し居たる夫の人等は毫も神の譽に付て心を勞する者にあらざれば彼等の心何等の痛みをも感じ居らざりしが、主は其様を見て如何に御意を痛めたまひしぞ、如此我等も神の御意を以て世を眺る時に世は罪と惡とを以て満され居るが故に我等の心は何處を見ても痛められざるはなかるべし、されど神は今我等の父となりたまひて我等に新しき縁を予へたまひしが故に我等は如何なる事情に接するも、此縁を思ふ事に由て慰めらるゝなり、而して此密接の縁は如何なる事情も患難も之を損ずる事能はざるなり、如此我等は今新しき縁を有つが故に如何なる時にもし自由の父に萬事を語る事を得るの特権あり、恰も小兒が常に父の愛を信じ且つ知り居るが故に事に出逢はば直ちに父の許へ奔り往きて萬事を打明け告ぐる如し、

我等が信ずることに歩む行路には極めて多くの事情ありて、我等が歩みを腦ます事をせん、されど我等は事情に接して益す父との縁を思ひ父と親しく相交るの特権を有するを思ふべき也、我等の身分は舊約の聖徒と異れり、ダビデ罪を犯したる時に神に棄てらるゝ事を恐れしが(詩五十一〇十一)我等は決して棄てらるゝが如き事なく、よし聖靈を愛へしむることあらんも、我衷にいます聖靈御自身を去らしむること能はず、そは我等は神と永遠の縁を有すればなり、又患難に出逢ひて我等は詩四十四〇二十三の如く言現はし一時失望を來して慰めを失ふが如く思ふ時あらんも我等は我等の事情を告ぐる處の神御自身と縁を有つが故に、かゝる中にも慰めは彼御自身より蒙る事を得るなり、されど思ふべし、我等は本性の人としては神より慰めを受くべき筈なきのみならず却て禍を受くべき者なるを、神は惡人の叫びに應へたまふ御方にあらざれば(箴一〇二十八)若し我等新しき縁を有たずば如何にか神より慰めを受くる事を得ん
同一〇九、我等心の中に必死を定む(此譯當を得ず、最も近き譯は「我等心の中に」云々)、パウロが如何なる場合に於ても記憶し居たる事は彼自身の已に死にし者にて、

自ら何の力なき者と辨へ居たる事なり、彼は兼てより常に心の中に斯く信じ居る故に境遇に由て教へらるゝにあらず、此故に彼は已を待たずして死にし者を復活らし得る大能の神御自身の助を求めたり」同一〇十二、我等に於て最も容易なる事は良心を打捨る事なり、而して此は常に失敗の大原因となるものなり、提前一〇十八―二十、或人理屈を以て我は最早や救はれたる者なるが故に今は如何なる行爲を爲すも不可なるべしといひて其行の事無頓着になるも、彼の良心は満足せざるべし、故に善良心を保つ事肝要なり、我等若し神の言に導かるゝ善き良心を失はば隨て信ずることをも失ふべし、我等が固有の良心なるものは全く汚れたる者にてあれば(提多一〇十五)、其良心は何事に付ても確かに教ふる者にはあらず、されど善き良心なる者は神より教へられて有つ者なれば之を打捨てざる様務めざる可らず、「善を假て謊をいひ良心を熔れ」(提前四〇二)と、我等は善良心を捨る事極めて容易なる者なるが、之を捨る時に忽ち神の前の自由を失ふのみならず、神との幸なる交りを損せらるゝに至るなり、又善良心を捨る時には忽ち善を假て偽となす者なり、其一例は撒母前四〇三を見るに

當時民は敵に勝つ事を得んものとして櫃をシロより携へ來らんと企てたり、此事は彼等の良心の神の前に働き居らざるを明示したるものといふべし、何となれば彼等の良心果して神の前に働き居らんには彼等は敵に勝たん事を企つよりも寧ろ自らを卑くし居るべきに彼等は然らずして、却て宗教的にも櫃を持ち來る事に由て助を得んとせり即ち神の物を用ゐて我儘を行はんとしたるなり、之れ彼等が善を假りて偽となしたる者にあらずして何ぞや、又耶七〇一―四を見よ、彼等は善良心を捨て神の殿を待みとなして以て良心に徹する預言者の言に耳を塞ぐために殿、殿といへり、其他馬太三〇九に於ける夫のユダヤ人等が已れアブラハムの子孫なるが故に自らを神の前に善き者と思ひたるが如く又猶太四に於ける主の名を呼ぶ者にして神の恵を用ゐて色慾の縁となし、が如き皆是れ善を假りて偽とせし者なり、然らば我等が良心は理屈に導かれて益を受くるにあらず唯神の前に働く事の必要なるを知るなり、我等は兄弟を通して神の言を聞きて幸を感ずる事あり、然り是れ素より幸なる事なり、されど此幸をもて神との交りの幸とは云ふべきにあらず、何となれば我等が神との交りは直接の縁を味ふ

事より出る者なればなり、夫のヨブを見よ、彼先きにエホバの事を耳にて聞きぬし時と、後彼目を以て見たてまつりし時とは其様全く異りしにあらずや、(ヨブ四十二〇五) 如此我等も神との直接の縁に於て交る事又神の恵を以て我が良心を守る事孰れも必要なり、」同一〇十四、パウロは主の來たまふ時の喜をば今の歩みの標準として働けり、」同一〇十五、主の日にはパウロもコリント人と偕に光の中に於て喜ぶ者なり、パウロ此事を確に知るが故に(茲に「信するに由て」とあるが此の原意は確に知るといふ意なり) 今も光の中にて交りを爲さんことを欲してコリントに至らんと志せり、されど彼等に至ることを止めたり、此は彼等の中に大なる罪を犯し、者あるにかゝはらず、彼等爲に自己を神の前に卑くせざるのみか却て誇る事を爲すと聞きたれば、彼、かゝる者と交るを得ざりしが故なり、如此彼、夫の地に到る事を爲さざりしが故に彼の患虚浮たる者の如く見ゆしかども、彼は其然らざるを言現はしたり、即ち彼若し彼等に到らんには、彼の到る事に由て主が崇められざるが故に彼は往く事を見合せたるなり、嗚呼彼は凡ての事に接して如何に主を標準とする者ぞ、」同一〇十九、二十、

神は舊約の時代に於て約束を爲したまふ時に「若ししてふ字を添へたまひし事を見る、例へば申二十八〇一、二「汝若し善く云々」と、されど民は其言に従ふ事をせざりしが爲に遂に祝福を受くる事能はずして他國の虜となりたり、又列王上二〇一四若し汝の子孫等其道を慎み云々」とされどダビデの子孫之を守らざりしに由て其位に即くべき子孫を興へられざりしが如し、かく神は約束を興ふるに當て「若し」なる字を加へたまひたれば其約束の成否は常に其人の生涯の最終に於て明かにせられたり、されど視よ、神の約束のキリストに由て成就せしむ、彼世に來る時曰けるは「神よ我、汝の旨を行はんとて來る」(來十〇七) と彼は始より成就せん爲に來りたまひし御方故、其約束の彼に出て完成せしは宜なる哉、神は主イエスが最終を始めに録するを得たり此は彼に失敗する事あらざればなり、之に反し人間は必ず失敗する者なるが故に其約束の始めに當りて預め「若し」なる字を加へ置かざるを得ざるなり、嗚呼神と主御自身との外に誰か變らざる者あらん、(雅一〇十七)、申三十一〇十六に於て神は民が將來其約束を破りて失敗する者たるを預め告げたまひき、而して又聖靈もパウロに由

て集會の將來を預め告げたまひたる事ありたり、(使二一〇二十九)如此人は皆失敗する者たるを免れず、我等かく思ふ事に由て自己を卑くするに至るなり、」かのシルワノヒラモテは己の事は何をいはずして唯神の子イエスをのみ宣傳へたり、確かなる言を以て主を宣ふる者は幸なる哉而して又神の約束は既にキリストの中に成就せしが故に我等は主の來たりたまふ事の確なるをも知れば常に彼を待ち喜ぶの特權を有つなり」同一〇二十一、キリストに堅くし云々どあり、彼は實に變る事なき我等が靈の岩なれば彼御自身に於て堅くせらるゝ者は幸なり」神の榮の我等に由て顯はるゝに至るとは如何に奇しき事なる哉、神は誠に神にいますが故に我等の如き罪と愆とに死にし處の詮術なき者を殊更に用ゐて榮を現はすことを得させたまふ、我等は之に由て神御自身の御働きを味はしめらるゝなり」此事に應ふ者と我等を爲したまふ者は神なりと(哥後五〇五)我等は今神に由て生れたれば神と直接の縁を有つを得たるが之を有たしむるに先つて、彼若し「若し」なる字を加へたまひしならば果して如何ぞや、我等は失敗する者なるが故に決して其縁に與ること能はざりしならん、されど神は其縁を

有たしめんために御自身と我等との間に一の仲保を要したまへり、即ち此三章及び四章はそれを問題として記されたるなり、主イエス天に往きて神の右に坐せり、之に由て神の約束の既に彼の中に成就せしを知る、而して神は常に此御方を我等に味はしめ識らしめて我等の心を益す堅うせんとしたまふなり、出埃記卅四〇二十九を見よ、此處はモーセが二度目山より下りし時の有様なるが、彼が最初に下りし時には未だ彼の面に光は輝き居らざりき、此は其時にはイスラエル未だ失敗せざりしを以て神と彼等と直接の縁ありて更に仲保の必要なく、モーセ未だ仲保とならざりしゆゑなり、されど後には彼等罪を犯して既に神との縁を斷たれば初めて仲保の必要は生じ來れり、神は人間の失敗を見て之を改めんと爲たまはず、別に仲保者を立て、新なる縁をもたしめたまへるなり、夫のモーセが最初山に上りしは全民を代表してありしが、再び登山せし所以のものは彼、全民の仲保者たらんとしてなりし故に彼が下山すると否とは神がモーセの仲保を受け入れたまひて全民の罪を赦したまひしや否やを明かにするものにてありしなり、然るに彼は下山し來りたり、しかも彼の面には光、輝きを發ち居

たり、之に由て彼が仲保者たる事明かにせられたり、而して此事實は實にキリストの模楷にてありしなり、今やキリストの御面よりは神の榮光照り輝き居れり、されど此輝きは彼が仲保者たる事を示す者なれば、我等は彼を見奉る事に由て、曩に亡ぶべかりし者が今は彼に由て直接の縁を有つを得たる恵を味ふを得ん、嗚呼我等は實に此仲保に由て神に和ぐ事を得たれば彼に由て常に神と直接に交る事をも又得るなり、同一、〇二十二、我等は今已に神の屬とせられたるが故に其証として我等は聖靈に由て印せられたるなり、抑も我等が聖靈を以て印せられたるは我等の行に依るにあらずして單に救の福音を聞き之を信じたるが爲なるは弗一〇十三の示すが如し、而して聖靈我等の中に宿りたまふに由て我等は憚らずして神をアバ父よと呼び奉るを得るものなる故に、我等若し斯く呼ぶ事を得ば之に由て聖靈御自身が我等の中にいましたまふ事を知るを得るなり、同一〇二十三、二十四、我等曩には人として種々の區別ありしものなれども今は主にある者となりしが故に神の前に於て毫も區別ある事なく、其の與へられたる處の智慧、義、聖、贖ひ及び有つ處の縁皆同一なり(哥前一〇三十)かく我等が

受けし處の者に毫も異なる事なしと雖も之等を味ふの点に至ては又皆同じからず、而して之を味はしむる者は我等の智慧にあらずして聖靈御自身にいましたまふなり、我等に膏を沃ぎし者は神なりとあれば、神は聖靈に由て我等を益すキリスト御自身の衷に堅くしたまふなり、而して我等の依頼むべき御方は神御自身なり、我等は兄弟より膏を沃がれたる者にあらざれば又彼に依頼むべきにあらず、此故に若し兄弟に依頼せば、彼は人にして其性失敗する者なるが故に、我等も亦た彼と共に失敗するの時あるを免れざるべし、加之、斯くせば我等、人と直接の縁を有つ事となるがゆゑに神の恵を味ふ事を得ざるべし、かのパウロは失敗せし兄弟を眷る時に彼等に其失敗を知らしむるを得るも彼等を助くる事を得ざるを承知しむたり、そは彼に一人の兄弟の靈を育つるの能あられざればなり、哥前三〇六を見よ、其處には「長つる者は唯神なり、種る者灌ぐ者數ふるに足らず惟貴きは長る處の神なり」と録さる、如此我等の中に若し神自身の働なくば我等は誰にも長てらるゝ事能はざる者なれば、我等は宜しく常に神との直接の縁を味ふべし、我等若し兄弟より言を聞く時、其云ふ處甚だ解し易きが

故に其兄弟にのみ重を置かば此は神との直接の縁を重んぜざる者にして又キリストに於て堅くせらるゝよりも却て兄弟に於て堅くせらるゝ者といふべきなり、此故に語る者は已が無益にして兄弟を長て得る者にあらざるを知りて語り、聞く者の心又兄弟の前にあらで神の前に働かん事を要す、若し然らざれば我等は集會の時にのみ喜びて己れ自ら主の前に喜び又堅うせらるゝ事能はざるべし、茲に於てパウロの云へるやう「我等なんぢらの信仰を主とらんとするにあらず云々」(二十四)と、彼が如此言現し、ゆるは彼自身が神と兄弟等との中間に立入り之れがために彼等が神との直接の縁を味ふの妨もならん事を恐れたるによるなり、「我等は宜しく神御自身を信すべき也、世には神ある事を信する人少からずと雖も、彼等は神御自身を信する者にあらざるゆる素より救はるゝこと能はず、何となれば悪鬼も亦たしか信すればなり、(雅二〇九)而して我等は神御自身を信すると同時に神の凡の言をも信すべきなり、太四〇四を見よ神の口より出る凡の言と記されたれども其幾分の言とあらざるなり、我等若し人を信せば必ず彼の云ふ凡の言をも信せん、さらば況や神の言をや、而して神の言は信する

者の中に働くなり(帖前二〇十三)かのペテロを見よ、彼は主の御品性を信じ且つ知たるが故に又其言をも信じ居たるにあらずや(約六〇六十八、六十九)我等も亦た彼の如くあらば誠に幸なり、「同一二二四、「なんぢら信仰(信すること)に由て立ばなり」とあり、此言はコリントの兄弟等が神御自身の前に堅く立ち居りしが故に誰も彼等を動かす事能はざりし事を示すものといふべし、「今太七〇二十一終までにつけて思はん此處には主の名を以て教へ又其名を以て奇蹟を行ひし處の人々に付て録されあり、扱て彼等が如此奇蹟を行ふを得しは唯だ主の御名の力を藉りたるが故にして、彼等の心主及び其言を信じ居らざりし事は彼等が行爲に於て明かにせられたり、即ち主、彼等に向つて「我曾て汝等を知らず、悪を行ふ者よ我を離れ去れ」(太七〇廿二)と宣ひしに由て見るを得るなり、さらば神御自身と其言とを信するてふ事は如何に我等に於て大切なる者ならずや、「パウロは兄弟等の喜樂を助けんとするなりと云へり、我等皆神の前即ち光の中を歩む事をせば、互の心其光に照されて共に交際る事を得るのみならず、之に由て互の喜樂を助くる事をも又得るなり、此故にパウロは聖徒と共に交り

に於て喜ぶ事能はざる中は、神が彼等の中に働きたまはん事を待ちて彼等の中には到らざりしなり、「神はパウロの手に由て書をかくしめ、之を用ゐて兄弟等を堅くなしたまひたり、彼、兄弟等に書を送るや、素より聖靈に由てそれを認めたることを申すまでもなしと雖も、其書中に、彼兄弟等を愛へしめしを悔ひたる由を記したり（哥後七〇八）斯く愛へしめしは彼の心神の榮を思ふ極めて熱心なりしが故、其言ふ處嚴しく又兄弟等の感ずべき様認めたるに由るなり、されど彼が如此愛へしめしを悔ひたれと云々ど書しは彼の心亦た我等の如く動かされ易き者たるを示すなり、而して彼が書を彼等にするに至りし所以は神の名が集會の中に汚されたるを愛へしが爲なるに外ならず、彼の心絶えず集會の爲に勞し且集會を愛する事極めて熱心なりし故に神は彼を用ゐて書を送らしめたまひしなり、彼の心如斯集會に向ふが故に集會が神の愛に由て回復せられん事をのみ願ひ居たるや推知するを得べし、彼の願ひ茲にありしが故に彼等が失敗より回復せられし時に彼の心は實に神御自身に由て喜びたり」嗚呼如何なる時にも神御自身を喜ぶてふ事は如何に信する者に於ける最大の特權にはあらずや、世人

を見よ、彼等は唯だ世にある物を以て喜びを満す事を得ると雖も又他に一の喜ぶべき物なし）されど我等に於ては然らざるなり、而して我等が有つ處の喜びは人誰も奪ふ事能はざるものなり（約十六〇二十二―二十四）我等は信する事に由て種々の喜びを得ると雖も死にて復活りたまひし主御自身を面のあたり見奉るに比ぶべき喜はあらずかの弟子等ユダヤ人を恐れて集り居りし時に主イエス彼等の中に来りて御自身を示したまひしかば之を見る彼等は實に主御自身を喜びたり、嗚呼此喜びは如何に大なるぞ全世界の富も能く之を價する事能はず、如何なる者も亦た此喜びを奪ふ事能はざるなり、夫のトマスを見よ、彼眞に主の復活りたまひしを疑ひたる者なりしに實際に主御自身を見奉るに當てや、思はず識らず彼の口は開きて「我主よ我神よ」と言現はし己が心の喜びを示しにあらすや、其時主は答へて宣はく「見ずして信する者は幸なり」と（約二十〇廿八、廿九）我等は今主を見ずして信するの特權と其喜びとを與へられたり、嗚呼此喜びは如何にトマスよりも優れる者ぞや、誠に我等の福は彼が見し時の福にまされる者と云はざる可らず」約十四〇二十、二十一に「其日……我、汝等

に居る事を知るべし」と又「自己をあらはすべし」とあり、我等は今實に主と偕なる者なり而して今の時に我等の心を燃す者は主の御言なり、恰も路二十四〇三十三に於けるかの弟子等の心の燃ゆしは主の御姿を見し時にあらずして却て聖書を解きたまひし時にてありしが如し、「パウロは常に神御自身の御働きを待ち居る人なりしが故に、彼、兄弟等の失敗を聞きし時に速にコリントに至らんとはせず、却て靜に神が彼等を回復したまふの時を待ち居たり、是れ實に神を崇むるの舉動といふべきなり、神はパウロに由て此失敗したる兄弟等に集會の事を教へたまへり、集會は一体として責任ある者なるが故に一人の兄弟の失敗は全体の弱きを顯はすものたる事恰も肉体中小指一本に病あらば全身の弱き證據となるが如し、而して今日集會は全体として失敗したり、此時に當りて我等の學ぶべき事は各自己を神の前に卑うする事なり、我等の自然は神の名の汚されたる時に却て自己の弱きを忘るゝ者なり、舊約書中に於て一例を擧げん、馬拉基一〇六を見上當時民等はエホバの名を藐視りつゝありしに拘はらず、却て彼等は「我等如何で汝の名を藐視りしや」といひて毫も己の如何なるやを知らざり

き、此他同二〇十三、十四、十七、及び三〇十三等の如く、彼等は實に己が罪と失敗を毫も感じ居らざりし(黙二〇十七を參覽せよ)、而して此轍には誰も陥り易し、又士師記十六〇二十を見るに、かのサムソンも亦た己が失敗し居るを知らざりき、視よ彼はナザレ人(神の名に聖別せられたる者)たりしなり、如此今日我等も主の名に聖別せられ居る者なるに却て己の名や己が潔きを守る事を知りて己が弱き者たるを感ぜざるの傾きあるにあらずや、誠の信者は各々皆主の体の肢なるが故に其宗派にあると否とに拘はらず神の前に有つ處の位地は皆同じ、然るに若し我等今主の名に聖別せられたる者のみを知りて他に心を用ゐる事なく即ち自らのみ潔き者の如く思はんには我等が思ふ所行ふ所こそ却て宗派的なれ、夫の往昔のバリサイ人を見上(パリサイも亦た)彼等はモーセの律法を守る爲には頗る熱心にして時に己が一命を捐つる事をも厭はざる程にてありしかども、彼等の誤は己を潔くして他の者に優れる如く思ひ居たる事なり、如此我等も亦た自らを宗派の人に比べて我は聖別せられし者なるに、彼等今尙は不義に交り居るが故に、我等は彼等よりも優れりと、かゝる言、よし我等の口に顯はれずとも、心

に此思想を懐き居らんには、我等は寧ろ彼等よりも悪者なりと謂ふべし、素より我等は主の名に聖別せられたる者たるには相違なし、されど若し之を眺めて我等自身が潔き者となりたるが如く思はば却て聖別せられざる人よりも悪き者となるなり、主は凡ての信者の聖にいます(哥前一〇二十)故に誠の信者は皆聖き者なれば我等は我等を聖めし主の名に適ひて歩まんために不義を離れたるなり、即ち不義を離るゝに由て聖くなるにはあらざる也、かのサムソンがエホバの已を離れたまひしことを悟らざりしは彼神の名を保つ事を忘れて己が名を保たんとしたるの結果たらすんばならず、「己に云へる如く凡ての信者皆にキリストの体なるが故に我等二三人の集りは是れ素より完全の集會にあらず、今日此地(京都)にある誠の信者たらんもの皆我等と共に一の處(哥前十一〇二十)に集りて主の御前を覺ゆべき筈なり、若し果して然るを得ば誰か其様を見て驚かざらん、何となれば哥前十四〇二十四、二十五、に不信者さへ我等が嚴肅の集會を見る時に其心懼を生じ、誠に神のいます事を知るに至る由録されたればなり、されど今は主の周圍に集めらるゝ者は極めて小數なるが故に之を見る者却て其弱

きを云はん、然り我等は誠に弱き者たり、然れど我等此事實を知りて其弱きを神の前に言現はさば寧ろ却て幸なり、夫の撒加利亞四〇六一十を見上茲に小き事の日云々との言あり、我等が弱き有様の公然あらはれをる事は寧ろ自己の力を以て其弱きを蔽はんと企つるよりも幸なり、何となれば我等は弱き事を知れば知る程に益す神の恵の必要を感じて止まさればなり、我等は今主の名に集められたるの二三人なるが故に其弱き事は主の來りたまふ日にまで及ばん、人の自然の性は強大の事を好み又それを以て誇る者なりと雖も、神の前には大事は却て失敗を招き小事は自己を卑くするの機となれば、我等は小き事を益す味ひ却て神の前に溢るゝの喜びを有つを得ん、

以弗所書三章十四節至二十一節

此處にてパウロ、聖徒の爲に祈るに父に跪きたり、何故父といふ名が特に記されしぞ、此は父とは愛を現はす名にして獨子との縁を意味する名なればなり、即ち録して「父は子を愛して萬物を其手に授けたり」(約三〇三十五)とあるが如し、世の性質は然に

して即ち己を愛し己を富ます事を以て目的となす者なれば世には父の愛即ち御子を愛するの愛なき事は明かなり、人間は何程富める者にしても其心の中には實に見すばらしき貧乏人なり、彼等は貧さが故に唯だ熱心に己が利益を得んと勉む且つ己に利益を與ふる人を賞め又尊ぶ事を爲す、此は彼に由て富ましめらるゝが爲なり、如此人の心常に満足する事を知らざる者なるが故に唯だ與へよくと叫ぶ事恰も箴言三十〇十五上半に記されたる者の如し、世の心常に慾の爲に多忙なるが故に毫も靈魂を顧るの違なく、否それが爲には全く無頓着なる者なり、(詩百四十二〇四)夫の路十五〇三十三十六に於ける放蕩息子を思へ、彼尙は産業に富み居りし日には彼が多くの人友は絶えず與へよくと叫びて彼と交る事を望みしならん、されど彼一朝赤貧洗ふが如き境遇に立至るや、何を彼に與ふる人なかりしにあらすや、世人は實に其心の中に貧き者ゆる常に奪ふ事を以て喜びとするも與ふる事を好まざるなり、されど神は如何、神は充足らへる御方にて毫も乏しき所なくましませば、我等が罪に死にし時にすら御獨子を賜へり、嗚呼彼の愛は如何に驚くべき哉、愛は實に與ふる事を以て満足する者

といふべき也、而して我等が今此父の愛を知るに至りしは、曩に主イエス世に來りて我等に悉く其愛を顯はしたまひしに由る、「己に云へる如く父は世が拒み捨たる主を此上なく愛したまふ御方にて且つ榮めたまひしが、我等の天性は之に反し決して主を識り且其貴さを味ふを得ざる者なり、此故に若し我等の心主の價値を識り主を榮め奉ることを得たりけんには、此は、我等の智慧によらず父の我等に示したまひたるものと識らざる可らず(太十六〇十七、同十一〇廿七)、夫のパウロは實に父の御子を愛したまふ愛を味ひ識りたるが故に父に跪き祈りたり、「同三〇十六、榮の富どの字に注意すべし、世には世の榮ありて外觀甚だ美はしく見ゆること恰も草の花の如しと雖も(彼前一〇二十四)悲哉其榮の中に富なるものあらざるが故に忽ち枯凋みて有らずなること又恰も花の風に吹かれて飛散るが如し、神の榮は神御自身に適はしき者なるが故に我等本性にして此榮に堪へざるのみならず、却て其榮の爲に燒盡さるべき者たりし(詩五十〇一一三)然るに神は恵を以て我等の中に働きたまひたれば我等は今其榮を喜ぶを得るのみならず、又その榮の富を以て飽足らはしめらるゝ者とはなりぬ而し

て此富なるものは夫の世人が有する如き外部に屬る處の産業にあらずして、我等の衷人の有すべき富なるが故に人誰も之を奪ふ事能はざるなり、「同三〇十七、キリストは我等が心の分なり、父の御心も彼に由て常に喜ばたまふが故に我等も亦た之を識りて彼を喜ばい誠に幸なり、而して彼を喜ぶ時には必ず父との親しき交りを有するが故に其喜びの深さ又他に譬ふべきものあらざるべし、我等は實にキリスト御自身を分とする者なり、而して彼を分とする者は其心神の富を以て満されたる者といふべき也、されど之に反し「神に付て富まざる」者の様は如何、請ふ路十二〇十六―二十一を見ん事を、併せて哥後八〇九をも讀みて恵の富を味ふべし、「約第一四〇七、八、我等は今神の子供とせられたるが故に、愛ある者とせられたり、その愛は我等が固有の愛と全く異なるものたり、抑も彼の愛は不義を喜ばずして眞理を喜ぶ者なるは哥前十三〇六の示す處、然るに我等の天性之に反し毫も眞理を喜ぶの心なし、見よ主イエス世に來りたまふや、彼は眞理を愛する御方なるが故に、其口常に眞理を語りたまひたり、此故に眞理を嫌ふ人々、彼を十字架に釘くるに至りしなり、是に由て之を觀れば眞理は

神の喜ひたまふ處にして、愛は彼にのみある者と知るを得べし、我等此の愛ある者となりたれば我等は常に富める者とせられしを喜ぶのみならず、斯く富ましめらるゝ事は父が御子を愛したまふことを顯はすこととなるが故に我等の慾の性質を満足せしめば、愛の性質を満足せざるなり、實にキリストは我等の新しい性質を満足せざるゆゑにキリストを汝等の心（性質ある場所）に居らしめよといふなり、又神は此愛に循ひて我等を恵み其旨の奧義を示したまへり（弗一〇九）即ち神はその復活らしき主イエスに萬物を服せしめたまふ處の奧義を今御旨のまゝに我等に示したまひぬ、「羅八〇二十六、二十八とに於て我等の味ふべき事二個あり、即ち「知らざる事」と「知る」事となるなり、我等毎事に祈を捧ぐる事を得ると雖も、預め神の御旨を知つて祈る事能はざるなり、されど我等の祈例へ神の旨に適はざる事ありとするも、幸なるは我等の衷にいます聖靈なり、彼は神の旨を預め知りたまふが故に我等の爲に祈る事を爲したまふ、此故に神は我等が其旨を知ると否とに拘はらず唯だ御自身の恩召に由て我等の中に働きたまへば、我等は時至り必ず事實に於て其御旨のありし處を知る事を得ん

是れ即ち二十八節に「我等は知る」とある所以なり、如此我等が神の御旨を悉く知り得ざるは事實なれば、若し之に反し能く悉くそれを知ると云ふ者あらば、極めて傲慢の言なり、「同三〇二十、神は常に我等の思ふ處にまさりて萬事を御旨のまゝに行ひたまふ御方なるが故に、我等は之に由て益す神の神たる事と又神はキリストの價値に循ひて今我等の中に働きたまふ事とを知り慰めらるゝ事を得ん、腓四〇六、七、を見よ我等若し自己の理屈を以てせば必ず如斯云はん、即ち我等若し祈るべき處を知らずんば寧ろ祈らざるの勝れるに若かずと、されど我等の思は神の御思と全く異れば神は我等の理屈を空しくして却て「求める處を告げよ」といひたまふ、而して彼は必ず我等の祈に答へたまふなり、「我等の心は常に神御自身に萬事を打明くる事に由て平和に充さるゝことを得るなり、

使徒行傳九章十一節

茲に「彼は祈て居り」との事を記さる、サウロか神に祈禱を欲ぐる事此處に至るまで

未だ一回も記されたるを見ず、彼か天主の前に碎けて全く自己の無益なる者たるを知るに至るや、彼は忽ち變じて祈禱の人とはなれり、路十八〇一三と九一十一とに於て二人の祈禱者を見る、一は寡婦にして又の一はパリサイ人なり、前者は己れ依頼むべきの夫を既に失ひたる者なれば最早や彼の必要を充し得る者なく、此故に彼の心自然に弱さを感じ居りしが故に、其祈る處實際的なりしや明かなり、されど後者の祈る處然らず、彼の祈禱は頗る熱心なるが如く見ゆしと雖も唯だ立派に自己の事を述べ立て、祈り、その心少しも自己の無益なる者たるを知らざりし故、其祈は唯だ儀式の祈りなりき、抑も祈禱なる者は祈禱者先づ自己の無益なるを全く力なきとを知るよりして自然に生ずるものなり、若し然らざれば其祈る處實に不自然なるのみならず、全く儀式的なるが故に寧ろ祈らざるの勝れるに若かさる也、
 神は我等を此世に居らしむる間力を予ふる事をせず、却て萬事に於て自己の全く無益なる者たるを學ばしめたまふや恰も狼の中（狼の性質を備ふる者にてありしかども、今は新に造られたるがに於ける羊の力なきが如し（太十〇十

故に其狼たるの力を失へり、されど我等は其力を失ひたるが故に羊となりたるを思ふべし、然るに我等は時に羊なる已が性質を打忘れ狼たるの力を出して却て世の力に負くるが如き事あらざるか、我等の弱くして必ず事に逢ひ失敗する者たることは我等の経験に由て明かなれば、我等は常に此事を記憶し居らざる可らず、何となれば我等は自己の弱き事を感じ居る時には神御自身の必要を知るのみならず、其祈る虚實際的となればなり、夫のサウロを見よ、彼曩に弟子等を責め殺さんとするに當りて神に祈りを爲さざりしにあらずや、彼か此時彼等を殺すために神に祈るの必要なし、唯だ祭司の長の權を要したるのみ、然りと雖も彼後、主に従ふに至ては彼自らを羊の一人に數へ「我等」といひて(羅八〇卅六)哥後一〇八、九の如く實際神御自身の必要を感じたり、如此我等は世人の如く強きを誇る者にあらずして却て祈りの人即ち弱きを知るの人たるなり、而して我等か如此感じ居る事に由て神の名は我等の中に益す崇めらるゝに至るなり、「賽五十六〇七を見るに祈の家は神の名を以て稱へらるゝ處なるを記さる、如此神の家は祈禱する場所たるの評判あるべき家なり、今主の名に集められたる

二三人も亦た祈禱の人たる評判あるべき事なり(馬太十八〇十九、二十)我等は聖言を聞くために集會に來ることを必要と感すべし、されど祈禱のために集めらるゝ事に就てはそれ程必要を感せざるの傾きあるにあらずや、此は實に己が心の傲慢なるを示す者といふべし、何となれば我等若し祈禱の必要を感せざれば、必ず己が力に倚頼みて事を爲し、毫も自己の無益なる者たるを知り居らざればなり、我等が日々に執る處の業務は種々異り、各自の出逢ふ處の事情も隨て同じからずと雖も、我等は如何なる時にも自己の無益なるを識りて神御自身の必要を感じ居らば誠に幸なり、「西三〇十七の如く我等若し凡の事、主の名の爲を思ひて神の前を歩まば其幸と喜びとは果して如何、我等は常に世人の喜びにまされる喜びを以て喜ばしめられつゝある者なり(詩四〇五一八)

我等は常に我等の爲のみならず、凡の人の爲に祈るの必要あり(提前二〇二、二)今列下七〇一―九に付て思はん、當時サマリヤの市城敵に圍まれて人々皆食するに糧なく其様實に憐なりし、時に數人の癩病者は夫の夜逃せし敵の陣屋に赴きて大に分捕し、

始は己が性質の慾のまゝに金銀衣服を奪ひたりと雖も、遂には此の好消息にはげまされて、自己の價値なきをも打忘れて、それを宣傳へたり、我等の性質は自己の益のみを以て満足する者なるゆゑに好消息にはげまざるゝ事肝要なり、我等の心は彼等の如く慾心を以て充しつゝあるか將た亦好消息を以て充しつゝあるか二者孰れかに屬し居る者なり、パウロを見よ、彼が周圍にありし處の者は皆慾心を以て充され居る世人のみなりしか、彼は其中にありて御子の福音にはげまされて熱心に神に事へたり（羅一〇九、哥前九〇十六）使徒さへも福音にはげまざるゝ事を要したりき、我等が自然の性は極めて鈍く且つ弱き者なるが故に、我等は決して自己の力に由てはげまざるゝ事能はざるなり、茲に於て祈禱の必要は生じ來るなり、而して好消息は今や萬人に對して最も必要の者たるは提前二〇三、四の示すが如し、「既に云へるが如く、我等若し實際自己の無益なる事を知るに至らば必ず祈禱の要をも知るに至らん、而して其時の祈禱は多辯を費さずして却て短簡なるは即ち太八〇二十五に於ける夫の弟子の「主よ救ひたまへ」と一言叫びたるが如し（但し此の祈禱は我等か永遠の救を願ふべき例に

あらず、實際なる祈禱の例なり）彼の祈禱極めて短かしと雖も、其告ぐる處の言は自然に出でたる者にして又實際的なりしなり、如此祈禱の要は實際的自然のものたる事なり、又弗三〇十八及び十六に於て、孰れも「凡の聖徒云々」の文字に接す、我等の祈る處恒に一局部に止りて凡ての神の子供等を覺ゆるの鈍き者なりと雖も、若し神の愛と其御心との如何に凡ての者に向て廣大なるかを思ふ時に我等も亦た凡ての聖徒の爲に祈る事を知るを得ん、

終にいふ、帖撒羅尼迦後書二〇五を見よ、我等は今神の右手に坐したまふ主イエスの其處より來りたまふを待つ者なるが、此時に當りて我等の鈍く且つ變り易き心は、神の愛とキリストの忍耐とに導かれて保れん事を願はしけれ、主は永遠變りたまはず、而して彼は我等を御自身の御許に携擧げたまふまでは其心満足なしたまはざるを我等は知る、彼曰く我速に至らんと、我等希くは皆主よ來りたまへと云ひ居らん事を、

約翰傳十二章十二節至三十三節

我等は約翰傳を讀む時に特に二個の事實に接するなり、即ち一は主イエスが神の子御自身に在ります事と、一は彼が自ら謙卑の位地を取り給へる事はなり、彼は神の御子なるが故に、父とひとしく榮めらるべき御方なり、然るに彼却て自らを卑くして「神の遣し」者と言現はしたまふを辭せず、嗚呼此言を彼の口より聞ける我等の心爲に禮拜の念に充たさるゝ也、彼、世に來りて如此自ら謙遜れり、是を神の御子が人としての完全を現はす者と云ふべし、然り彼は御自身を神の前に卑くし虚くしたれども、之によりて神の子たるの尊位を失はざるなり、反つて彼は其謙卑の有様に於て神の御子たる事を現はし給へり、試に約五〇十七、十八、を見よ、當時人々は主イエスの此言を聽きて彼は已を神と齊しくする者なりと云ひたりき、誠に彼は恩に於て御父と偕に働く處の權を有したまふのみならず、彼は亦た父と偕に榮められ敬はるべき御方なり、約五〇二十三は之を明示す、特に同十〇三十は彼が父と同一の位地を有したまふ事を示すものといふべき也、素より人間は其心に於て毫も神の子を崇むるの思ひを有せず夫の弟子等にも亦た然り、彼等が信仰に由て主を眺めし時には、約一〇十四の如き

御方として彼を見るを得たりと雖も、彼等か不信仰の眼には唯だ普通の旅人との外見にざりしにあらすや(路二十四〇十八、約四〇十二節を参照せよ)主は極めて謙りたる現はれに於て歩み給へるが故に、不信仰の眼は彼に在るの榮を認め得ざるなり、而して彼を識るの力は信仰なり、我等は此書を讀むに當て特に之を要するものとす、我等は約翰傳に於てのみ、主イエスが最も謙遜りたる言即ち「神の遣し」者云々」どの言に多く接するなり、請ふ試に約六〇二十七―二十九を讀まん事を、「イエス答へて彼等に云けるに神の遣し」者を信するは即ち其工なり」と、父と共に榮めらるべき彼の口より斯くも御自分を虚ふするの言を聞く、而して彼が斯く言現はすは實に父の前に於てのみにあらずして彼を拒み捨てし處の者其の前に於ても同じきなり、此点に於て我等は如何に彼と異なるものぞ、我等は神の前に於て自己を卑くせざるにあらず、然れど世人の前に於ては決して然かするを好まざる者なり、神に試みられしかのヨブを見よ、彼始め神の前にありし時は自己を卑くし且神を讚美したりしと雖も、後彼、友人の前に立つや、忽ち自らを義とし高くせり、是れヨブが神の前にての自己の有様を

人の前に來りて忘れしによる、我等亦た是と同一の失敗に陥りて人の前に己を高くする事、如何に多きぞや、然れど主イエスを眺めよ、彼は神の御子にいます、人たる者、彼を崇むるこそ當然なれ、然るに彼力なき人々より嘲けられ苦めらるゝ時に尙ほ且つ御自身を卑くして御自身の力を出だし給はず、約八〇五十九に就て見るべし、人々彼を撃たんとする時、イエス隠れて出で行きたまひたる由に記さる、彼何故にかく隠れ行かざるを得ざりしや、此は彼自らに力なきが故か、夫の人々を恐れたるが爲なるか否決して然らず、彼はアブラハムのあらざりし先よりある御方なり、彼の中に力あるや素より言を俟たず、されど彼かく隠れ行きたまひし所以のものは彼が凡ての人の前に於ても自ら謙卑の位地に在りて歩み給はんが爲のみ、一切の事情と場合とに於て彼、只だ御父に倚頼み、彼をのみ力として歩まんが爲なり、嗚呼彼の御謙遜は如何に驚くべき哉、彼は實に御自身を守る爲に自らの力を現はしたまはざりし者といふべき也、

(約十九〇卅九、をも参照すべし)

扱て十二章に於て主が榮を受けたまふべきの時は來りたり、即ち二十一十九に於ける

か如し、當時イスラエルの人は十三節の如く大呼して主イエスを歓迎したりき、然れど主は此時王位に即く事を喜ひたまはざりしなり、彼、人々に捨てられたまひし時御自分の爲に力を用ゐずして唯だ謙遜りたまひし如く今や榮を受くべき時至りたりと雖も彼は之を求めざるなり、之を喜ばざるなり、然れど彼若し之を受けんと欲せば之を受くるに於て決して不都合なる事あらず、そは彼は此權威を受けたまふに當然の御方なればなり、されど彼は此權威を有つ事を喜びたまはざるのみならず、却て十字架の死を取り給ふを辞みたまはず、茲に於てか、主の完全なる愛はてりかゝやきぬ、夫れ如此主イエスは世に於て王位に坐する事を喜ひたまはず、又人より之を受くる事を欲みたまはずと雖も來らんとする日に於ては彼必ず王位に坐せん、其時は彼三大資格に於て萬物の長たり所有者として現はれ給ふべし、即ち(造り主)として(贖主)として(人の子)としてなり、今、西一〇十六、十九に於て彼が萬物の造り主又保ち主たるのみならず、十字架の御死の故に彼又贖主にいたしましたまふ事を見るべし、されど我今此等に就て多く語るを欲せず、唯だ彼が人の子として萬物を有したまふ事に付て

學ばん事を欲す、試に詩八〇四(四節の初めに世の)及び五節を見よ我等此處を讀みて人の子に關する神の御目論見の何處にあるやを教へらる、即ち主は自ら造り主たるの權威に於て萬物を有したまふのみならず却て人の子として亦た之を有したまふなり是れ神の定旨なり、されど此榮と主御自身との間に一大問題あり、即ち十字架の「苦み」是なり、而して此十二章は又之を問題としたる者にして、即ち主イエス御榮と權威を受けたまふに先ちて必ず十字架を通過したまはざるを得ざる事を記したり、請ふ其二十三節を見んことを、此處にメシヤ榮を受くべき時至れりと記さず、單に人の子と記されたるに注意せよ、彼はメシヤとしては十字架を通過するの必要あるなし、何となれば詩二〇六一八に神は主イエスを呼ひてメシヤとし且つ彼の求めたまふ處の事は其何たるを問はず、神悉く答へたまはざるを得ざる事記されればなり、然りと雖も主イエスは世に於て此メシヤたるの榮を受けんよりも寧ろ自ら生命を捐てん事をよしとしましたまひたり、彼は世人より稱揚せられたる時に其心毫も喜ばざるのみか、却て飢たまひたり、(可十一〇十二)何故に彼、かゝる時に其心飢たまひしを他なし、

彼は人より榮を受くる事を喜ばざるが故のみ、而して彼か如此謙遜の様に於て世を歩みたまひし時、彼に於て最も必要なりし者は神御自身にてありき(詩六十二〇一)此故に彼の全生全靈全身は常に父に向ひたるのみならず、父を思ふ事を以て糧となしたまひたり、同二十四節を視よ、「誠に實に爾曹に告げん、一粒の麥若し地に落て死すば唯一にてあらん、若し死なば多くの實を結ぶべし」と、是れ彼の心なり、彼は御自身を思ふに勝りて我等を思ふと云ふべく、彼は御自身の榮を愛するに勝りて我等を愛すると謂はざる可らず、嗚呼是れ何等の愛ぞ、彼は人より金の冠を戴かんよりも、寧ろ我等の爲に棘の冠を被せらるゝの位地に立つ、嗚呼是れ何等の愛ぞ、彼は御自身に安易を取らんよりも、我等の爲に十字架の御苦に至るを辭せず、嗚呼是れ何等の愛ぞ、彼若しメシヤたるの榮を受くるを喜ひたまはず、我等の罪の爲に却て十字架の上に御身を捨て給へりと思へば、その我等を求めたるの愛の深さ果して如何、彼、此世に在まし、時、王位に昇りしと假定せよ、彼十字架を遂げざりしと假定せよ、是れ若し彼に於ての事實たらんには、我等如何にして彼の御心の愛を知るべきぞ、然れど主は

我等の爲に御生命を捐てたまへり、是に於て我等は愛と云ふ事を知りたり、約第一書三〇十六を見よ、此處に主の字を用ゐてイエス或はキリストとも記されざるに注意すべし、而して如此記されたる事に意味なかるべからず、即ちキリストと記されたる時には我等か罪人たる時彼の死にたまひし事を示すと雖も、主と之れある時には彼か權威を有したまふ御方として示す者なり、嗚呼此權威を有する御方即ち主は我等の爲に死にたまひたり、如何に驚くべき愛なる哉、我等は今其死の故に彼と共に榮に與かるに差支へなき者とせられたり、宜なる哉、彼の死は永遠に神の前に於ける我等の讚美の問題たる事、此故に我等は此十二章を讀みて彼が榮ある王位に即くを喜ひたまはざりしは正しく我等を愛するの故なりしと知るを得るなり、

抑も十字架は主に取りて安易の場所にあらざるなり、彼の御心、彼所を思ふ毎に、彼所に於ける御苦を思ふ毎に、未だ曾つて憂愁悲哀の感に充たされずんばあらず、主は宣はく、「我心、愛へ痛めり」と、彼は聖に在まし給ふが如く、彼所に於て罪とせらるゝ事の恐るべきを感せり、彼は神を識りて其交の福を完全に保ちしが如く、彼か

彼所に於て神より棄てらるゝ事の恐るべきを感せり、彼、未だ十字架に上らず、然れど、彼之を思ふ毎に其心の愛ひ痛める事、如何に深き哉、世に所謂英雄豪傑なるものあり、その心は鐵の如く石の如し、彼等は時に非運に際會するも更に苦を感せず、又之を感せざるを誇るものあり、主イエスの心を如此ものと見做すものは禍なる哉、彼の御心はやさしき御心なり、悲しき事を悲しく感じ、苦しき事を苦しく感ずる事、彼に及ぶものあるべからず、視よ、「我心愛へ痛めり」と、然れど、主は此時より免れん事を求め給はず、「否、之が爲に我、此時に至れるなり」と宣ひぬ、嗚呼、是れ何等の途ぞ、何等の從順ぞ、夫の十字架は彼の愛を完全に現はすと同時に、彼の從順を又完全に示すものと云ふべし、「我が本章を讀みたる目的は、主の御苦みを思はんが爲なり、彼は御自身を忘るゝ程に我等を愛し、御父の榮を思ひたまひたり、而して彼の謙卑は父の前に於ての如く、人の前に於ても亦た完全なるを見る也、

已に十二章を讀みて主が榮を受けたまふべき場所に於て死を示したまひたる事を見たりと(同十二〇二十四)、此十三章に於ては其死に伴ふ所の榮を見る、即ち主イエスが今、現に有し給ふ所の榮なり、而して十四章は多く聖靈を問題として記されたり、茲に其順序を約言すれば、第一は主の死にして次は彼の榮なり、第三の事實は主の崇められたるに基因する聖靈の賜とす、今聖靈に就て聊か述る處あらんとす、請ふ約七〇三七―三十九を一讀せん事を、主イエス世にいまし、時彼未だ榮を受け給はず、贖罪の大業、未だ成就せざる故に、聖靈、誰の中にも住みたまはざしなり、かのペンテエスタの日に至て初めて聖靈は降臨せり、とは十字架上の贖の己に成立てるのみならず此時既に主イエス天に於て榮を受けたまひたればなり、主は約十四章に於て彼を我等に遣はしたまふ事を約束したまへり、而して十五章に至ては聖靈を受けし者の果を結ぶ事に付て記さる、我等は自ら果を結ぶ事能はざるが故に若し父の榮となるべし果を結ぶ事を得るとすれば、此は已より出しにあらすして我等が聖靈を受けたるが爲なりと知るべし、「今我が陳べんとする問題は主が天に於て御血を以て贖ひし民に向つて如

何なる務を取らたまひつゝありやといふことなりとす、されど今之を陳べんとするに先つて同十二〇二十八を讀まん、主イエス世にいまし、時には常に父の榮をのみ之れ求めて自らに付ては何をも求めたまはざりし事を我等は知る、「願くは父上汝の名の榮を顯はせ、此時天より聲ありて云ふ、我其榮を顯はす、再た之を顯はすべし」と、主の宣ふ所又行ひたまふ所の悉く御父の榮となれるは勿論なれども、彼がラザロを甦らし、事は特に御父の榮たり、然れど、之のみならず、主は御生涯の最終に於ては十字架の上にて父の榮を現はしたまひたり、即ち其死に由て父の榮を限りなく顯はしたまひぬ、彼は御自身の榮を第一として神に要求せしを見ざるなり、約十七〇一に於て「爾の子の榮を顯はしたまへ」と父に申上げたまひしかど、其御目的は之によりて「父の榮を顯はさんが爲なるのみ、嗚呼、彼は如何に御父の榮に充たされたる御方なる哉、彼世にありて神御自身を顯はしたまひしのみならず、父を顯はしたまひたり、彼の言も父を顯はし(約十二〇四十九、五十)彼の工も父を顯はせり、抑も十三章は今天にいます處の主を意味するものなり、即ち其一節に彼の死は假定め

らる、彼は既に自ら死を経し者の如く語りたまふなり、而して彼の愛に充てる御職權は今天に於て我等の爲に取りたまふを知るべし、彼は此務を執りたまふ前に必ず先づ死を通過したまはざるを得ざりしなり、其四節は晚餐に付て記されたるが、此逾越を食したまふ事は主の御死を指すことにして即ち哥前五〇七に記されたるが如し、而して彼の御死は我等が限りなく彼に愛せられたる事を明かにする者にて、彼は我等を指して世にある民と宣ひ、我等を世人と區別したまひたり、聖書は主が世を愛したりと記したる事なし、彼は世より拒絶せられたる時却て父に訴へて世は爾を識らずと宣ひぬ、然り彼は世を愛せず、然れど我等を愛せり、彼、我等を指して世にある民といひて、彼が我等を世人と區別して愛する事を告げたまふ、嗚呼之れ如何なる愛ぞや、而して此愛は實に夫のパウロをして其生涯を通じて彼に凡ての艱難を忍耐せしめたるものなり(哥後五〇十四)、彼は實に此愛に動かされたる者、導かれたる者なり、されど彼が、如此信することに由て歩むを得しは、彼に特別の力ありしが故にならず、又主の愛が彼にのみ厚かりしが故にもならず、彼唯だ信することに由て歩みたるのみ、果

して然らば我等も亦た彼に倣ひて歩むことを得ん、何となれば信仰の則は彼に於ても我等に於ても毫も變る處なければなり、提後一〇十二、及び哥後四〇十三を参照せよ、當時アジャにある者皆パウロに背く、されど彼は曰く「我は我が信する者を知る」と、而して彼の心自若たり、我等も亦た信する者なるが故に彼の如く言現はす事を得るなり、「主イエス世にある民を潔め別てりと雖も彼の心は唯だ如此せしのみを以て息む事能はず、此故に天に於て尙ほ此民に就て心を用ゐたまふ、我等之を思ふべし、即ち御言を以て我等の歩みを潔めたまふなり、乞ふ其二節以下を見んことを、我等は彼が有したまふ身分の如何に貴尊なるやを知る、然るに彼却て弟子に事ふるのみならず、尙は且つ彼等の足を洗ひたまふ、嗚呼此は如何に驚くべきの光景なる哉、彼世にいましむ時既に如此務を彼等の爲に執りたまひたりとせば況や天にある今の時に於てをや、而して水は神の言を意味するなり、夫のペテロは主より足を洗はるゝに際し、彼は之を辭みたり、「爾絶て我足を洗ふべからず」と我等は彼が斯く言現はしゝことに由て、我等の自然の心は祝さるゝ事を好むと雖も、潔めらるゝ事(言に由て)を好まざる

る者にてあるを得たり、然れど、神の言若し我等の心の衷に自由に働くにあらずんば我等は決して祝福を蒙る事能はざる者なり、若し主の言をして我等の良心と心とを潔むることを得せしめざらんには、我等は決して光に於て彼と共に歩むこと能はざるなり、主が「若し我、爾を濯はすば爾は我と干渉なし」と宣へるは畢竟之が爲なりと知るべし、而して聖徒たると罪人たるとを問はず、神の言に潔められ又碎かるゝは甚だ「福なるものなり今試に使二〇三十七を見よ、當時多くの人々、使徒等より神の言を聞きし時、彼等の心刺るゝが如く感じ、其心全く碎かれけるが、彼等は茲に於て神の純粹なる恩を蒙りたりと、之に反し使七〇五十四以下に於ける人々はステパノより神の言を聞きし時、彼等は毫もそれを喜ばざるのみならず、却て彼を殺すに至りたり、此故に、彼等はイスラエル一國民として遂に祝福を蒙ること能はざる者となりしにあらずや、如此前者は神の言を聞きて心碎け而して祝福を蒙るを得たるも後者は全く之に反せり、此故に我等の靈若し神の言に由て碎かれずんば決して祝福を受くること能はざる者とす、されば我等の心常に神の言を味ひ又それに由て歩むの最も幸

なることを職るを得るなり、是れ蓋し主が其言を以て我等の良心と心とを潔めたまふの結果といふべし、主イエス今天にありて我等を愛す、彼は我等を愛して終にまで至るなり、彼如此我等を愛するが故に又潔むる事をも爲したまふなり(弗五〇二十六)而して彼が我等を潔むる毎に我等は必ず己の愚なるも虚き者なることを知りて主の前に自らを卑くするに至るなり、又彼が我等を潔むることは時に我等を審く事を意味するなり、斯くして我等に彼御自身の前にありて幸なる交際を有たしめんが爲なるを知らざる可らず、されど我等が神御自身の前に立つことを得るは神の言に潔めらるゝ故にあらずして主の御血に由るものなり、我等は之を混同せざらん事を要す、即ち其十節に於て「全く潔し」と記されたるは彼等が神の言に由て潔められたるにあらずして、主の御血の價値、即ち其力に由るなるを示すものなり、「キリストの血凡ての罪より我等を潔む」と、此故に我等彼の御血に由て潔められたる者は神の前に立ちて少の恐を有たざるなり、今や主イエス聖靈に由て神の言を我等の心に働かしめ而して其交際に居らしめたまふ、即ち彼天の處より言を以て我等の足を洗ひたまふなり、嗚呼彼の愛は

如何に大なるぞ、而して此愛より誰も離らすること能はざるは曾てパウロが羅八〇三十四、三十五に於て言現はしたるが如し、我等は種々なる事情に出逢ひし時又種々なる失敗に陥りたる時主が今天に於て我等の爲に執りたまひつゝある處の務に由り御言を以て潔めたまへることを經驗せしならん、實に我等の靈は神の言に由て潔めらるゝ毎に彼にまで生長する者なり、

其十三節を見よ、イエスは主たるの權を有したまふが故に我等は皆僕なりと雖も、彼又師にいまするが故に常に御自身の周圍に我等を集めて教へ導き又慰むることを爲す、彼が主として師として今日の處より我等を愛したまふ事を知る者は唯だ我等のみにして世は少しも之を知ること能はず、嗚呼如此父の旨に従ひて聖徒に事ふる御方を知るは如何に福なる我等の特權なる哉、而して彼が我等を愛する處の愛は彼が父より蒙れる處の愛と毫も異なる處なし、同十七〇二十六を見よ、爾の名とは父の名を指す而して父の子にある愛我等にあらん爲と記さる、主が父より愛せられたまふべきは素より當然の事なりと雖も、我等は彼に愛せらるべきの理由毫も之れなきなり、されば我等は

唯だ純粹の恵に由て彼に愛せられ居る者と知るを得べし、

約翰傳十四章十六節至二十六節

本章が聖靈に就て記されたるは既に云へるが如し而して聖靈の降臨は神が主イエスを崇めたまひしに由てなること、又本章の記す處なり、主イエス世に來りたまふや、彼其御生涯に於て父を崇めたまひたる事勿論なれども、其最も著しく之を現はしたまへるは夫の世人の拒み捨てたる處の十字架にてありしなり、此故に約十三〇三十一に於て「人の子榮を受く云々」と記されたるなり、茲に於ての人の子の榮とは即ち十字架の死を指す者にして、かゝる場所に於て父を此上なく崇めたまひし者は彼の外又他にあらざるなり、同十三〇三十二節は彼が天の處にて榮めらるゝ事を示す、彼が甦りて後、彼天に昇るや、彼は神の榮の中に榮を有したまふ者となれり、之れ即ち神が十字架に對する働き或は其報答と云はざる可らず、而して神の彼を榮めしは即ち神の義を示す事となれり即約十六〇十の如し、嗚呼主の御業は如何に父の御旨を満足せし

者なる哉、而して此事實が福音の基礎となりしとは、又宣なる哉、「主イエス世にいまし」時彼弟子等と偕に歩みたまひしは事實なり、されど神は彼等の中に住みたまひしとの事を聞かず、贖の業完成して主イエス天に往きたまふや、神聖靈によりて我等の中に住みたまふ事となりたり、是れ此十四章の問題なり、或人聖靈を指して只單に神の力と云ひ感化力なりと云ふ、此は大なる誤解なりと云はざるを得ざる也、何となれば聖靈は神たるの御品性を有したまふ御方なればなり、我等は彼の御働さを見て彼の御力を見るを得れども、彼は只神の力のみ思ふべからず、力は聖靈の御働の恒状なり、されど彼又心を有する御方なり、主權を有する御方なり、言を有する御方なり、試に使十三〇二を見よ、此所に「聖靈いひけるは」と記さる、又哥前十二〇十一に於ては「彼其心のまゝ云々」との言を見る、若しそれ聖靈が人々の云ふが如く一の感化力、一の力に過ぎざらんには、如何で心なる者あらんや、如何で主權者ならんや、如何で言を有するものならんや、されど、彼は神御自身なるが故に心もあり且つ命することをも爲し得るなり、今は此御方我等の中に住む此事實はキリスト教特有の眞理

なりとす、往昔イスラエルの民エチプトにありし時、神彼等と共に歩みたまひしと雖も彼等の中に住みたまはざるなり、神が彼等の中に住みたまふに至りしは贖の成就したる後ならずんばならず、此故に出埃及二十九〇四十六に「彼の中に住まんとて」と記されたりき、此は既にイスラエルの民の贖の成就せし後なりと知るべし（出埃及十五〇十三）此の如く弗二〇二十二に於て集會は既に贖はれたる者なるが故に神は聖靈に由て我等の中に住みたまふに至れり、主イエスが父より榮を受けたまふや、父は彼の名に託て聖靈を我等の中に遣したまひたり（同十四〇二十六）特に彼の名とあるに注意せよ、彼の名は眞に世の拒み捨てし處の名にてありしなり、されど父は其名を甚しく崇めたまひたるが故に聖靈は其名に託て遣はされたるなり、而して又我等が此名に由て罪を赦されたる事は約第一書二〇十二の示すが如し、我等の罪素より主の御血に由て赦されたる事を俟すと雖も、茲にかく記されし所以は主の名をば父が甚しく崇めたまひたるが爲ならずんばならず、次で腓二〇九を見れば萬物皆其名に膝を屈め榮を神に歸せざるべからざる事を記さる、以上三事實に於て主の御名の如何に尊きか

を思ふを得べし、」抑も聖靈、我等の中に住みたまふに至りし所以のものは彼、我等をして益す主を識らしめ榮めしめ且つ我等を慰めんが爲ならずんばあらざるなり、主イエス世にいましむ時、弟子等の慰は彼御自身にてありしなり、彼天に往きたまふに至て彼等を慰むる者亦た世にあらざるが故に聖靈は訓慰師として來りたまふなり、即ち約十四〇十六に於て「別」に慰むる者云々であるが如し、路二〇二十五以下に於けるシメオンがイスラエルの民の慰められん事を待ち居しが夫の人民の訓慰者たる御方はメシヤたる主なりき、如此、主が弟子等と共に在し、時は彼等の訓慰者たりしなり、然るに彼將に天に往かんすとす、されば弟子共の爲に他の慰むる者なかる可らず、是れ即ち聖靈なりとす、我思ふに主イエス天に往きたまひし時弟子等の心極めて弱きを感じたるならん、されど後、聖靈來たまひし時に彼等は主の愛の毫も變らざるを知りて喜びしなるべし、我等も亦た彼等の如く聖靈に由て今は主を識る者とはなれり、嗚呼、是れ何等の恵ぞや、而して我等の心聖靈に由て慰めらるゝは彼、我等に神の甚しく崇めたまひたる主御自身を示したまふが爲なるを知る即ち約十五〇二十六同十六〇十四

等孰れも聖靈は主に付て語りたまふを見るべし、又聖靈の我等に於ての他の御働きを知らん事を要す乃ち彼が我等の中に在る肉と戦ふ事は是れなり、而して我等がかゝる場合に於て能く肉に勝つ事を得るは已が中より出る力にあらざして聖靈御自身の力に由る者なるを知らざる可らず、加五〇十六、十七を見よ、此戦はかの羅馬七章に於ける戦とは全く異れり、羅七章に於ての戦は肉と新性質との戦なり、即ち再生れたる新人は律法を喜ぶ者なれど其性質其自身に力なきが故に肉の爲に抑へられて之に勝つこと能はず、但し我等は今主を信する者として右の経験中に居らざるべし、されど加五章の戦を経験するを免れざらん、肉なる者は常に我等の心を主より遠げんとする者なり、聖靈は之を拒みて我を主との交際に居らしむるなり、是を以て聖靈は常に肉に對して戦ふことを爲す、我と戦ふにあらざ、我が中にある肉と戦ふなり、茲に於てか我等は已が肉なる者を全く死の位地に置かざる可らず、或人は云ふ我は自ら漸次潔くなりて遂に全く聖く義くなるに至るなりと、されど是れ一個の異端たるを免れず、夫れ肉なるものは決して改良し得べきものにあらざ、我等は唯だ聖靈に由て自己

の行爲を滅すことを要するなり(羅八〇十三)我等の自然は己が注意を加ふる事を以て失敗するを免るが如く思へども此注意は決して肉の働きを滅すこと能はざるものなれば我等は唯だ聖靈に由て歩むを要するなり、而して聖靈の働きは常に我等を主にまで導き又主御自身を我等に示すが故に我等は彼に導かるゝ事に由て自己の如何なる者なるかを知り且つ自らを卑くするを得るに至るなり、如此我等の靈若し彼に導かれて己が死せし者たるを知るに至らば是に於て弗六〇十一十八に於けるが如く天の戦に與るを得べし、されど我等の靈、以弗所の戦を経験するよりも寧ろ加拉太五章に於ける戦を経験する事常に多からん、我等若し之を知らば之に由て益す自己を神の前に卑くするを得ん、我等は己が行爲に由て屢ば聖靈を愛へしむる事ありと雖も聖靈は我等が失敗の故に去り往く事をせざるなり、そは「彼限なく汝等の中にあればなり」と記されたればなり、(約十四〇十六)然り彼は主の贖の故に永遠に至るまで我等の衷に住みたまふなり、

腓立比一章二十節至二十六節

此二十一節はパウロの目的とする處を記し、者なり、彼業には己自身をのみ標準として歩みしも主を信せし後は唯だ主をのみ標準として歩みたり、此故に彼は生るにも死ぬるにも孰れにても唯だ己によりて主の崇めらるゝに至らん事のみを願へり、又彼は己が生涯を通じての凡ての働きよりも主御自身を以て最も優れる者となし、かば彼世を逝りて主と偕ならん事をぞ望みけり、されど彼ヒリビの聖徒等に必要なることは如何なる事なるやを知るゆゑに彼は肉体に止る事を嘉と定めたり、(二十二―二十四)彼云ふ「死ぬるも我益なり」と、扱てかく云へるは死其物が目當てなりしが故にあらす、主と偕に居らん事を以て最も美事となしたるが故なり、乞ふ哥後五〇二一九を見んことを、パウロは己れ身に居る中は主より離れ居る事を知れり、彼の唯一の願は身を離れて主と偕ならん事なり、彼此願を懐くが故に九節の如く身に居りても身を離れても唯彼の心に適はんことのみを勉めたるなり、されど彼は「衣の如く脱がん事」即ち死して主と偕ならんよりも寧ろ「彼を衣の如く著んこと」即ち主の來りて己が卑体の主

の榮光の体からだに象あやるに至いたらん事を願ねがへり、此故このゆゑに彼は「死しるも我益わがえきなり」と言現いひあらわはしたるも又「教主すくもわいイエスキリストの其處そのところより來るをまう」(ローマ三〇二一)と云ひて已おひが心の願ねがひを示しめしたり、特に此三〇二十節中「其處そのところ」よりとあるに注意ちゆういせよ、主きが今神いまかみの右みぎに坐ましたまふ事は唯ただ一の教理きょうりのみなるにあらすして實際じつざいの事實じじつなるが故ゆゑに我等われらは確たしかに彼かれが其處そのところより來るを待まちち得えるなり、而しかして我等われらの心こゝろ若ごとし此望こののぞみを以もつて主きを喜よろこび居まらば日々彼の來臨らいりんをのみ待まちちつゝ喜よろこびに溢あふれ居まるを得えん、我等われらの心こゝろは寸時すんじも空虚くうこの儘ままに居まる事能ことあたはず、必ず何なにかを以もつて充みたされ居まらざるべからず、此故このゆゑに其心そのこゝろ若ごとし主きを喜よろこぶの喜よろこびを以もつて充みたされ居まらんには其喜そのよろこびは父ちちの喜よろこびと同一どういつの者ものなれば極きよくめて幸さいはひなりと云いはざるを得えず(太三〇十七、約三〇三十五參讀)「我等われらの目的めくやくは主御きよ自身みづかみなるが故ゆゑに、假たゞ令世このよにある中なかに肉にくに屬つける主人しゅじんに事つかふることありとするも、此こは其主人そのしゅじんにのみ事つかふるにあらすして主御きよ自身みづかみに事つかふることなるを知しらざるべからず、(西三〇廿三、廿四、弗六〇五)、「爾曹なんぢらキリストイエスの意いを以もつて意いとすべし」(腓二〇五)主きは我等われらが歩あひに於おいての手本てほんなり、彼は神かみと匹ひしくある所ところの事ことを樂たのしむる事ことに難がたきことと思おもはず、謙へりくだりて最も卑いやしく

位地ゐちを取り、其御生涯きよなまに於おいて從順じゆんじゆんの途みちを歩あひたまひたり、我等われらは實じつにその御足跡きよあしあとに循したがひて歩あひべきなり、已おひが譽ほめを求もとむるは甚はなはだ惡わるし事ことなり、我等われらは世よより譽ほめめらるゝ事を求もとめざらめと或あるひは兄弟あひな等らより譽ほめめらるゝ事を求もとむることもあらん、故ゆゑに二〇五の勸すすめは肝要かんやうなり、されど主きイエスと我等われらとの全まづく相異あひことれるは主きは其途そのみちに就つきたまふ前に自ら貴たかき榮さかを捨すてたまひしと雖いへも我等われらに於おいては本來ほんらい空からき者ものなるが故ゆゑに又一いつの捨すつべきものとはあらざりしなり、此故このゆゑに我等われらも自己みづかみの骨折こせに由より謙遜けんそんらんとするれば却かへつて傲慢ごうまんに陥おつるの恐おそれあれば唯ただ主きの御謙遜おひけんそんを思おもふべし、さらば自ら卑いやしき心こゝろを以もつて歩あひ得えん、同四〇十三に於おいてパウロパウロの靈れいの力ちからは唯ただ主御きよ自身みづかみにてあるを記しるさる、彼は實じつに見みての事ことを主きの力ちからに由よりて爲なしたる處ところの人ひとにてありき、我等われらも亦また始めより力ちからなき者ものなれば主きイエスを離はなれては何事なにごとをも爲なし能あたはざる者ものなるを承知しょうちせざる可べからず(約十五〇五)、我等われらは宙たかいに救すくはれし時に力ちからなかりしのみならず(羅五〇六を參見さんけん弱じやくかりし時とき)信しんじたる後のちにても矢張やはり力ちからを有あたざる者ものなるは羅馬七章ローマ七の經驗けんげんに由よりて知しらるゝなり、かのパウロパウロは常つねに自己みづかみの力ちからなき事ことを知しりたれば、曾かつて主きイエスが世よにいましゝ時とき御父おんちちに

依頼よりたのみたまひたるが如く(詩十六〇一)神に倚頼よりたのみて主の足跡あしあとに従したがひたり、さればこそ彼は「我はわれに力ちからを予あたふるキリストに由よて凡もろての事ことを爲なし得よるなり」と言現いひあらはしたるなれ、

腓立比書ひりひしよは全章ぜんしょうを通じて信者しんじやの經驗けいげんを記しるしたる者なるが、之これを區別くわべつすれば即ち一章は主が我等の目當めあたなる事、二章は主が我等の手本てほんなる事、三章は主が我等の望のぞみなる事、四章は主が我等の力ちからなる事を記しるしたるなり、

明治三十年十二月廿四日印刷
明治三十年十二月廿八日發行

大阪市北區若松町百八十五番屋敷

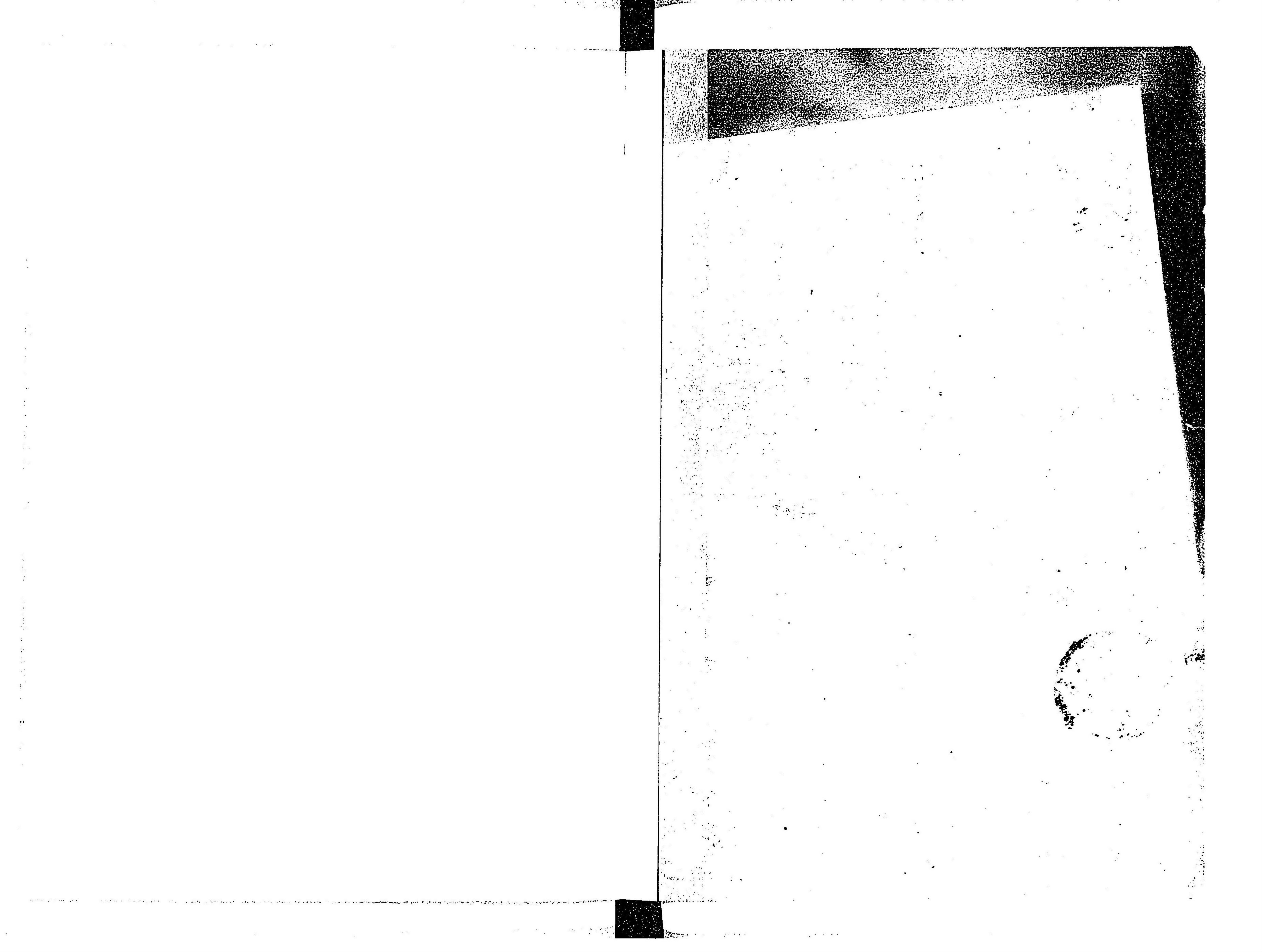
編輯兼發行人

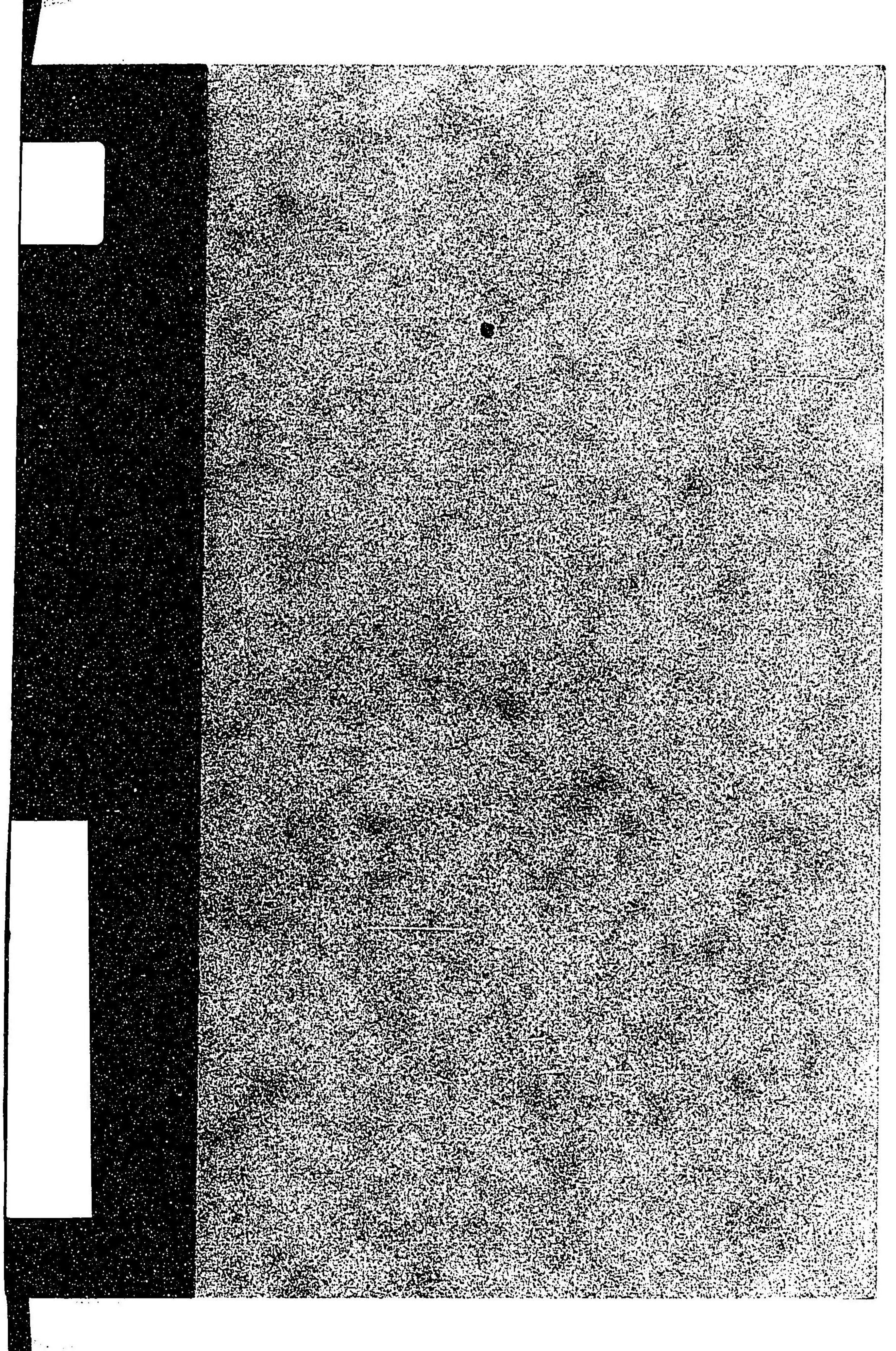
林 寛 二 郎

京都市上京區二條下ル榎町四十八番屋敷

印刷人

田 中 直 次 郎





特52

407

集会記事

国立国会図書館